

美人課長

誘惑残業中

午後五時半からの江梨子

ほし み こう へい
星海 航平

「二人って単なる部下と上司なのぉ？」

「江梨子課長、離婚したらしいぜ？」

井口先輩の言葉に固まった。ちやうど口をつけようとしていた水割りのグラスを止めてしまったのだ。

びっしりと露を帯びたグラスの中で、透明な氷の塊がかるんと小さな音を立てた。

内心の動揺を気取られないように、ゆっくりと問い返す。

「り、離婚……じつ？」

「だから、離婚だよ離婚。旦那と別れたんだってよ。」

井口先輩は同じ言葉を繰り返した。ツーフインターのバーボンに口をつけつつ、薄暗い店の奥へ視線をやる。ちなみに、井口先輩は口く派だ。

それはともかく、井口先輩の視線を追った。

同じ営業二課の五人でスナックに来ていた。初めての店だが、何でも長原係長がなじみなんだぞうだ。飲み屋には詳しくないけれど、比較的グレードは高い方だぞう。女の子も運っ葉で騒がしいタイプではなく、上品な感じの娘が揃えられている。

江梨子課長は奥のボックス席で、そんな女の子の一人と話していた。

「えー、じつぞう？ 課長さんなんですぞあ？ じつじつは長原さんの上司イ？ すじこーい」

……口調からすると、そう上品というわけでもないようだ。
江梨子課長も苦笑していた。

「別にわたし一人がすごいわけじゃないわ。課のみんなが助けてくれるから、務められてるのよ」
優等生的な答えだった。信用調査課の品地課長辺りが口にしたら、うそ臭いどころの話ではないだろう。

しかし、それが我々が江梨子課長の言葉となると事情が違った。自信に裏打ちされた余裕がその発言内容を保障している。そこには謙遜を慫慂無礼と取られない真摯さがあった。大人の女性ならではのものだと思う。

その姿はふだんの会社での様子と違うようには感じられなかった。

「……とても離婚したてには見えませんか？」

視線を井口先輩に戻した。

先輩も苦笑していた。

「江梨子課長がすごいほどだったのはお前も知ってるだろう。俺ら課員の前で動揺する様子なんか見せるもんか」

井口先輩の言う通りだった。

江梨子課長はまだ三十歳代半ばだが、うちの会社 外資系の保険会社である

ブライト^Bムス安全^S保険株式^I会社で最年少の女性管理職を務めていた。

BHSIには女性の役員もいるから、一応出世頭でこそないでも、切れ者という点では、社内の評価ナンバーワンであることに間違いなかった。意外に豊満な肢体をシックなビジネススーツに包んだ姿には、一分の隙もない。たとえテレビのサスペンス劇場のごとく人を殺してきた直後だったとしても、江梨子課長の様子から動揺の色を読み取るのは不可能だろう。きつとクイー^ル「クティ」とい言葉は江梨子課長のためにある。

「でもですね」

無駄とはわかりつつ、井口先輩に食い下がってみた。

「江梨子課長の旦那さんって確かエリーの公務員って話でしたよね？ お互いの経歴に傷のつきそうな離婚なんか、わざわざするんですか？」

井口先輩は微妙に苦笑の色を変えた。

「伝統ある英王室の皇太子だって離婚するご時世なんだぜ？ エリート公務員と、これまたエリーの女課長夫妻が離婚したっておかしかないよ」

一々もつとも意見だった。

江梨子課長は結婚後もずっと旧姓で通していると聞く。十年も前から別姓で通している先進的な考えの夫婦にとって、離婚なんて何ともないごときなのかも知れなかった。

「そんなものなんですかねえ」

何となく江梨子課長の方を視線を戻す。

そこで、向こうと目が合ってしまった。

「中野くん、カウンター席で井口くんと二人、何をたそがれてるの？」

「ちょいちょいと左手でおいでおいでなれてしまっ。」

「お酒の席じゃ、しつかり楽しまないんだめよ。」しつかり「わっわっわっ。」

「この辺が江梨子課長が切れ者である由縁だ。部下に接するときの緩急を心得ている。にっこりと笑つと糸みたいに細くなる目に、仕事中心に見せる非情なまでの伶俐さはなかった。

「や、えっ……」

一瞬躊躇する肩を、井口先輩が押した。

「遠慮すんなよ。江梨子課長自らのご指名だぜ。」

よく見ると、井口先輩はいつの間にか、反対側のスツールに座った店の娘の肩を抱き寄せていた。自分も呼ばれないための保険だろう。

「いたいこの間に。」さすがは保険のセールスマンといつへきだろうか。

入社年次は三年ほどしか違わないが、井口先輩は油断のならない人だった。

「それじゃ、失礼して」

言わずもがなの台詞を口にして、カウンター席を立つ。

江梨子課長と長原係長、仙田主査、それに店の娘が一人座るボックス席へと移動した。

「じゅん、じゅん」

課長はさつきまで話していた娘との間を空けると、そこを掌でばんぼんと叩いた。

「お邪魔します」

逆らっても仕方ない。素直にその指示に従った。

「おっ、そりゃ特等席だな」

「ちようど向かいの席に座っていた長原係長が「がはは」と口を大きく開けて笑った。

長原係長はおとなしい社風の中にあつて、珍しく豪放磊落な性格だった。どちらかといつと大企業病に罹患している感のある社内では、貴重な存在だ。

「特等席ってどういう意味ですか？」

ソファに浅く腰掛け、前のロテーブルに持参してきた水割りのグラスを置く。

「背もたれに大きく身体を預けると、江梨子課長の身体と密着してしまいそだった。

「「なる、わたしからいっばいお小言がもてるってことよ」

長原係長に代わつて、江梨子課長が答えた。くっくつと低く笑っている。左手で持った水割りのグラスの縁に、薄く口紅の色が着いていた。

「動弁してくださいよ」

「冗談だとはわかってはいたが、それでも泣き言を言ってみる。

「だーめ♥」

珍しく江梨子課長はほんの少しだけおどけてみせた。

「中野くんはふだん特にこちらから指示しなくても、きちんと仕事ができるでしょう？　だから、なかなかお小言をあげる機会がないのよ。あなたはわたしの部下なんだから、たまには文句の「しも言わせなさい」」

「……それ、無茶苦茶な理屈です」

情けない受け答えが笑いの壺に入ったらしい。長原係長と仙田主査の二人が爆笑した。

「わはは。中野、お前、真面目なだけで面白みのないやつだと思ってたんだが、意外に面白いやつだったんだな」

「長原さん、こいつ、去年入社した新入社員の中じゃ一番面白いやつですよ。ふだんは上にバカが付くほど真面目なんですけど、たまに突拍子もないボケをかましてくれるんです」

すっかり酒の肴にされている。

大口を開けて笑う二人を、江梨子課長がたしなめた。

「あら、二人とも余裕みたいだけど、油断していると、中野くんに足元からすくわれるわよ」

その指摘に、長原係長と仙田主査ははか笑いをやめた。

「……そう言えば、酒仙堂と海原商事の大口法人契約を取ってきたのは中野だったな」

「確かに、金額ペーアはともかく、契約受注件数で言うくと、入社二年目のルキーに追い上げられてはいますね」

ちよつと悄然としてしまふ。

そこで江梨子課長がまた、にっこり笑った。

「もちろんわたしは今の成績が二人の実力だとは思っていないわよ？　新人の中野くんだけががんばっているんだから、二人にも本気を出して欲しいとは思っているけれどね」

百万ドルの笑顔だった。

年代から言うと、二人は江梨子課長とそう大きく違わないはずだ。でも、明らかに人としての格が一レベル以上違っていた。

「そうですね。負けてられませんね」

「確かに、若造に負けてるようじゃ、話にならんわな」

長原係長と仙田主査の二人は決意を新たにしようだった。考えようによっては、ひどくちよろい部下だ。

そのとき、江梨子課長の反対側、左に座った店の娘が肩にしなだれかかってきた。

「ふーん。あなたって見た目若いのに、切れ者なんだあ」

何やらむにゅむにゅと気持ちいい感触を肩口に押し付けてくる。たぶりDかEカップくらいはありそうなボリュームだった。そのままこちらの顔を覗き込んでくる。

「はじめまして。中野さん、だったっけ？　わたし、リサよ。仲良くしましょ♥」

かなり明るめに染めたワンレグスを肩に流した。なかなか可愛い娘だった。年齢はごちらとあまり違わないように見える。左の口角のところにほつりとあるほくろが色っぽかった。

「あら、中野くん、モテモテね」

江梨子課長がリサの方を横目で見ながら、くすりと笑った。

「モテモテだなんて、勘弁してください」

眉尻を下げてみせると、またしても係長と主査の二人が声を上げて笑った。二人に間に挟まれて座った、もう一人の店の娘も喜んでいゝ。

「やっぱり仕事のできるやつは女からのモテ方も違うな、おい」

「まったく」

「中野さん、これから大変なおつ。リサったら、これと目をつけたい男にはすくなく積極的にアタックしちゃうんだから」

「これまた完全におもちゃにされている。苦笑するほかなかった。

「仕事にはかり根を詰めていても味気ない人生よ、中野くん。恋愛でも趣味でも何でもいいから、仕事以外に熱中できることを見つけたのも大事だと思うわ」

課長がきれいに話をまとめようとする。

「本心に勘弁してくださいよ、江梨子課長」

「いよいよ苦笑するしかなかった。

その言葉を、リサが聞きとがめた。

「ちよつと中野さん。どつして小島課長さんのこと、名前で呼ぶの？ ひよつとして二人はただならぬ仲だとか……」

細かじこを聞き逃さない娘だ。

「あー、リサちゃん、リサちゃん。違う違う」

仙田主査が自分の顔の前で掌を左右に振った。

「わがBHSエィ、リサちゃんの課長のこととは舌前の方で呼ぶのがふつなの」

「えー？ どおしよ？」

リサは子供のよつに頬をぶつてふくませた。

「……えーと、この店の娘が上品だなんて言ってたのは誰だ？」

「とにかくしつがなよ。」「さびびび説明するよになした。

「どつじつわけか、うちの会社には「シマムツ」で舌前の常務と部長が二人ずつ、「シマムツ」課長に至っては四人も在籍しているんだよ。つまり、オフィスをどっちを向いても、「シマムツ」さんだらけってことだね。どつても紛らわしいだろつ？」「そ、その「シマムツ」姓の人に限っては舌前で呼ぶのが社内での暗黙の了解事項になっているんだ」

「ええー。そーなんだあ」

何とか納得してくれたように、何より。

「でもねえ……」

しかし、残念ながらリサはすべてを納得してくれたわけではなさそうだった。

「課長さんと中野さんがお互いを見つめる目、ただ事じゃないわよ？ ホントに二人って単なる部下と上司なのあ？」

課長の顔をじと目で軽く睨んでいる。

そんなリサを、長原係長がこれまた豪快に笑い飛ばした。

「がはは。そんなわけないだろう。江梨子課長は立派な人妻なんだ。いくら遣り手の中野でも、他人の嫁さんを強引に寝取るほごじゃないぞ」

その瞬間、江梨子課長がほんのわずかに顔をしかめるのが見えた。その表情の変化は本当に些細なもので、注意していなければきこわからなかっただろう。

でも、確かにその瞬間、江梨子課長は不快そうな顔をした。

「これでも一応、営業職だからね。売り込みをするために、多少強引なことをやることはある」
「」

リサにかける声を意図的に少し強めにする。

「でも、江梨子課長を攻略するのは多少くらいじゃ全然だめなんじゃないかなあ。かなり手強そうだし」

「何よ。それじゃ、中野さんの方は小島課長さんに気があるってことじゃない」

リサがまたしても頬をふくらませた。肩を掌でへちりと叩いてくる。

「いや、こつ見えて、実は結構気が多かつたりするよ？ リサちゃんも素直に可愛いなあって思う」
「」

フォロ口になっているんだか、なっていないんだか、よくわからない一言を入れる。

「それホント？ 中野さん。嬉しいっ♥」

リサがぎゅつと左腕を抱きついてきた。またしてもむにゅむにゅと乳房を押し付けてくる。見せ付けられる形になった向かい側の三人が揃って苦笑した。

「おい、ホントにモテモテだな、中野」

「リサったら、絶対に逆玉を狙ってるでしょ。もう、するいなあ。あたしも中野さんを誘惑しちゃおうかしら」

「おいおい、サオリちゃん。ほぐらのは誘惑してくれないのかな？」

「えー？ だって仙田さん、もう小学生になる息子さんがいるんでしょあ？」

真ん中に座ったサオリといつらしい娘を中心に、きゃいきゃいと騒ぎ始める。
ちらりと視線を振ると、江梨子課長が薄く苦笑しているのが見えた。

／「…………わたし抱くっ。」

それから一時間ほどで飲み会は終わった。

「な？ 井口、中野。もう一軒つき合えよ」

長原係長と仙田主査の二人はまだハジメるつもりらしい。リサたちに見送られて店を出てきたと「らで誘ってくる。」

「すみません、俺、メグミちゃんと約束があるんで」

驚いたこと「井口先輩はさっきカウンター席で一緒だった店の娘と一緒に出て来ていた。まだ肩を抱いている。」

「すみませーん、長原さん。明弘ちゃんはこちらから早退けのあたしとデートなんでーす♥」

メグミといつらしいその娘も、いつの間にか井口先輩のことを名前で呼ぶようになっていた。

…………井口先輩、手が早過ぎ。

「何だよ、そりゃ」

さすがの長原係長も興奮めな顔だ。

「そんじゃ、中野。お前はどうすんだ？」

対象を限定して尋ねてくる。

「申し訳ありませんが、そろそろ終電がやばいんで…………」

やや苦しげに言い訳をした。

実は、さっきの店で四軒目だったのだ。いい加減、勘弁して欲しい。まだ時間に余裕がないわけではないけれど、そつ大きな嘘でもないだろう。

…………仕方ねえなあ」

長原係長は最後に江梨子課長に聞いた。

「それじゃ、課長はどうします？」

江梨子課長はその美貌に薄く苦笑を浮かべた。

「わたしもそろそろ失礼させてもらおうわ」

「そつですか」

ほんの一瞬だけ残念そつな表情を作る。

でも、長原係長と仙田主査の二人はそんなことでめげたりはしなかった。

「どうしては二人でどうしてになりますか」

「そしたら、どうだ？ 久しぶりにマキちゃんの店に顔を出してみるか？」

「あー。いいですねえ。」「のこのらマキちゃんのと「らには顔を出してませう」

仙田主査が何やらいやらしい手つきで掌をわきわきさせた。長原係長の鼻の下も、心持ち長くなった気がする。

「そんじゃ、決まりだな。うへへ」

「ええ、決まりですね。ぐへへ」

たちまちのうちに、二人の間だけで通用する「ンセンサス」を構築してしまう。どうも『キちゃんの店』とやらは女性である江梨子課長と一緒にには行き辛いところらしい。

「それじゃ、課長。わたしと仙田はもう一軒、寄ってきますよんぞ」

「お先に失礼します。課長も、お帰りはお気を付けて」

何かに追いついてられるように、長原係長と仙田主査の二人は薄暗い通りの向こうへと消えていった。しそいそといつ擬態語が似合う姿の消し方だ。

「課長。俺たちも」

「明弘ちゃん、借りてきまーす♥」

井口先輩・メグミ組もその後を追うように、いすこひもなくなっていくてしまふ。

原色系ネオンサインの灯りだけに照らされた夜の通りに残されたのは二人だけだった。

「中野くん、あなたも向かうのは駅よね？」

江梨子課長がわずかに首を傾けながら、尋ねてきた。

「最寄りの駅はこの辺り一帯に広がる繁華街を抜けて、高架をくぐった先だ。」

「ええ。細かい道筋は覚えてないですけど」

「答えるぞ、」

「それじゃ、駅まで一緒に行きまじよう」

江梨子課長は「こちらの答えを確認する前に、軽やかに踵を返していた。」

「は、はい」

慌ててその後を追う。

夜の薄闇の中でも、江梨子課長の後姿は颯爽としていた。

会社を退けてそのまま街に繰り出しているのは、課長が身に着けているのは仕事用のスーツのままだ。シンプルなデザインの白い上着にタイトな膝丈の同色スカート。足元も外回りに適した三五センチヒールのパンプスを履いている。

かなりアルトルが入っていると思うだが、その歩く様はファッションモデルのように美しくかつ。拳措の「フツ」に気品が感じられる。

何となくその後姿に見惚れながら歩いた。

「」

「あ、ひら〜」

江梨子課長がふと足を止めた。夜空を振り仰いでいる。

「しられるように、上を見上げた。」

「顔にぴちり、と水滴が当たった。」

「……雨〜」

「みたいね」

江梨子課長と顔を見合わせる暇もあればこそ。降り始めた途端に、雨脚はかなり強くなり始めていた。ネオンの灯りが雨に煙り出す。

「天気予報じゃ、今晚一杯は大丈夫って言ってたのに」
「でも、これ、ちょっとやばいですよ。」

すでに夜の通りを歩いてきた人たちは蜘蛛の子を散らすように散り散りになっている。「こちらもどこかに避難しないと、面倒なことになりそうだった。」

「中野くん、」

「たたたつと駆け寄ってきた江梨子課長がくいつと腕を引いた。」

「え？ ああ……」

有無を言わず、引張られてしまう。

「早く早く」

江梨子課長に誘導されたのは少し行った先にある、妙に背の高い建物だった。入り口を潜るとき、その脇にピンスポット照明の当てられた小さな看板が見えた。

「え、江梨子課長？ 』休憩／＼二時間六千七百円から……」

思わず声が裏返ってしまう。二人が足を踏み入れたのはラブホテルだったのだ。

「雨がやむまで、雨宿りするだけでしょ？ それとも、中野くんはわたしみたいなおばさんと一緒にこんなところへ入るのは嫌？」

江梨子課長はさも当たり前のように小首を傾げてみせた。

「……いや、別に嫌とかそういつことではなくて……」

「……さてもさるになつてしまつ。」

その際に、江梨子課長はとどん受付にまで進んでいた。

「部屋はわたしが適当に選んじやつていいわよね？」

どうやらこのホテルの受付は無人化されているようだった。奥の壁が各部屋の様子を表わした写真パネルになっている。部屋の数はいずれも二十室ほどだろうか。空いた部屋をボタンで指定すると、下の口に部屋の鍵が自動的に落ちてくる仕掛けだ。

江梨子課長がさっさと前払いの料金を支払機に投入して、適当な部屋のボタンを押した。予想通り、部屋番号を表わすタグの付いた鍵ががちゃんど落ちてきた。

「三〇四号室です。はい、おめ、」

引き止める暇もあればこそ。あれよあれよと言つ間にエレベーターホールへと引張られて行ってしまう。三分も経たないうちに、その三〇四号室とやらに到着してしまつた。

妙にけばけばしい内装の部屋に、江梨子課長と二人きりだ。

「……」

絶句するほかない。

対して、江梨子課長の方は妙に明るかつた。

「ネー、ラブホテルの部屋ってこんななのね。残念、ベッドは回転しないみたい
まるで修学旅行で宿泊する学生のようにはしゃいでいる。目に付いたものを端からかちや
ちやっしてだ。」

「天井が鏡張りってのは本当なのね。ベッドサイドの「の」マークについて何かしら。」

その途中で、江梨子課長はちゅちゅくちゅちゅが思考停止状態に陥っているのに気づいた。

「……あら。子供みたいにはしゃいでしゃべっていいな。」

ちゅちゅと恥ずかしそうに、苦笑する。

「わたし、前の夫とは見合い結婚だったから、こつこつとこつと来たのは初めてなのよ。」
どつちやら自分の子供じみた行動を恥じているようだ。

でも、こちらが気になったのは別のことだった。

「……前の……こつち。」

そう尋ねた瞬間、江梨子課長の表情から拭うように笑みが消えた。

「……井口くんが誰かから聞いているのでしょ。」

ぼつり、と漏らしながら、江梨子課長は派手なカパーのかけられたベッドの上はすんと腰
を下ろした。

「前田との協議離婚がようやく成立したのよ。これでわたしも晴れて花のバツイチってわけ」
さるりと舌の先を紅い唇の間から覗かせる。江梨子課長が再び浮かべた笑みはぎっぴままでと

違ってとても弱々しかった。

前田とというのが例の工率ト公務員だといつ元。夫のことなのだろう。

「もう三月も前から別居しているから、今更何の感慨もないんだけど。まあ、一区切り着
いたかなとは思っているよ。中野くんをこんな風に誘ったのも、そのせいなのかも。」

それで得心のいったことがあった。そもそも江梨子課長は今日みたいに同じ課の連中と夜の
町飲みに出るタイプではなかったのだ。

決してつき合いが悪いわけではない。だが、どこかで線を一本引かれているのを感じること
よくあった。

その江梨子課長がなぜそう親しいわけでもない課員たちと飲みに出てきたのがずっと疑
問だったのだ。頭の隅っこに張り付いた小さな疑問がゆっくり酔わせてくれなかった気がする。
その疑問が胸の中で溢け出していた。

「ついでに、めんなさね。中野くんにはんな愚痴を聞かせちゃって。迷惑なだけよね。」

江梨子課長はパンプスを脱ぎ捨て、ベッドの上へ横座りした。ふう、とため息をつく。

「あーあ。年下の男の子の前で弱音を吐くななんてわたし、まるでだね。課長だなんて偉そ
うな肩書きがついてても、てんでかたなしたわ。何もかも嫌になりそう。意気地なしの上司で、
めんなさね。」

それは今までに見たことのない江梨子課長の姿だった。気弱げに微笑む様は消える直前に

揺らぐ蠟燭の炎を連想させた。

それは日頃の、勇将のごとく凛々しい仕事中の江梨子課長のごとが好きた。でも、今の儂々な姿に幻滅するごとはなかった。

「……謝るごじないですや」

ようやく肩の力が抜けた。常態でないのは江梨子課長も同じなのだ。

ネクタイを緩めながら、手近なソファへ腰を下ろす。

「そりゃ人間が生きていれば、人生のうちには色々なことがありますって……」って若造のくせして、何か偉そうな言い方ですね」

苦笑して、頭を掻いた。

江梨子課長も苦笑を返してくれた。

「……ありがとつ。少し気が楽になったわ」

深夜のラブホテルの一室に、奇妙な沈黙が流れた。

「お礼……した方がいわね」

江梨子課長がほつりと漏らした。

「わたしの愚痴につき合ってもらったんだもの。お礼をしなきゃ」

何やら切迫した雰囲気という言葉だ。

「そんなの、ごいんですや」

薄く苦笑する。

「上司の愚痴につき合わされるのは部下の仕事みたいなもんですから」

「ごは笑って済ましておいた方がい」

でも、江梨子課長はそんな言い訳なんか聞き入れてくれなかった。課長は独り言のように言った。

「うっん、そんなわけにはいかないわ。仕事上のことならともかく、ごくプライベートなことば」

愚痴をぶちまけちゃったんだもの。きちんとお礼をしなきゃ」

「そんなの、構いませんっつ」

「……」

ごしゃごしゃと笑つごぢぢらの顔を、江梨子課長はじつと見つめた。その視線が妙に真剣なのが背筋をぞくぞくさせる。

「……え、ご……？ 課長？」

妙な間が恐ろしくなつてごわごわ声をかける。

すると、

「……ねえ、中野くん」

江梨子課長は本当に突拍子もないことを聞いてきた。

「……わたしのこと……抱く？」

「……笑？」

頭の中が真っ白になった。

遅れて、後頭部をぶん殴られるような衝撃がやってくる。

「ええ江梨子課長っ!! なんな何を言ってるんですかっ!!」

思わず座っていたソファから腰を浮かせた。

「だっ!!」

江梨子課長はらしくもなく、拗ねた表情をした。

「中野くん、会社でいつもわたしのことを物欲しそうに見ていたでしょう？ あれはわたしを抱

きたいって「こじゃなかつたの？」

「!!」

またしても、ショットガンで胸を撃ち抜かれたような衝撃を受けた。

「そっ、そんなつもりは……」

「……違っのっ」

「……」

重ねて問われると、返す言葉がない。

「まあ社内の男性陣には多かれ少なかれそんな傾向はあるのだけれど、中野くんは中でも特に情熱的だったものね」

「にっつ微笑まれてしまっつと、もはやどんな言い訳も存在を許されるわけがなかった。完敗だ。道化本人が自分が道化だと気づいていなかったなんて、てんで笑えない。

「ほすりとソファの上へ浮かせていた腰を落とした。

「……まあ、江梨子課長に意がなかつたと言っつと、嘘になりますけど……」

今更誤魔化しても仕方がない。素直に打ち明けることにした。

「っつぶん。こんなおばさん相手に、どうもありがとう」

江梨子課長は照れたように薄く笑った。

かなりずるい。

少し唇を尖らすことにした。

「自分でおばさんなんて言わないでください。江梨子課長はその……とつても魅力的です。」「まあ、っつつしまじょう。離婚したばかりだったので、おだてられちゃったわ」

江梨子課長はまたしてもおどけてみせた。

「おっつつかじゃありません」

思わず強引調子で叫んでしまった。

「江梨子課長はその……本当に素敵な女性だと思います」

「……」

きつて場の空気を笑って誤魔化そうとしたのだろう。

でも、江梨子課長も誤魔化し切れなくなりましたみたいだわ。

「もう、わたしたら何をやってるんだろ。一回りも年下の男の子に慰められちゃうなんてほんと課長失格だわ」

「だから、失格とかそいつ話じゃなくて……」

「わかってるわよ」

自虐気味に呟いた江梨子課長は「こちらの台詞を途中で遮った。

「中野くんがわたしのことを大切に思ってくれていることはわかったわ。だから、せめて今宵だけでもその気持ちに伝えたいと思ってる」

「……課長っ」

「こちらからの問いに答えず、江梨子課長は裸足のままベッドから降りた。

先にシャワーを使わせてもらったわね」

作り付けになった隣室のシャワールームへ向かう。

「……えとっ、少しは「さす」の話も聞いてください」

「後で聞くわよ」

課長はそのままシャワールームへ消えてしまった。

部屋に一人で取り残されてしまう。

「……いったいどうなってるんだっ」

独り言に思えてくれたのはかすかに聞こえてくるシャワーの水音だけだった。

／ 遺憾するかと細い声が出た

……五分後。

江梨子課長は素肌にバスタオルを巻き付けただけの姿で再び現れた。

「中野くんはどつするの？ シャワー、使っ？」

肩のラインをわずかに越えたところで切り揃えられたポプカットの黒髪はタオルにすっかり包まれている。それを解きながら、課長はベッドへと移動した。首を軽く振ると、くせのない髪がふわりと広がる。

「じゃ、その……」

言い淀んでいるうちに、江梨子課長はベッドの上はすんとその肢体を横たえた。

「それじゃ……するっ」

今まで見たことのない視線で射抜かれた。

その瞬間、腰骨の辺りに鈍い衝撃が疾るのがわかった。

「……ですか……」

「言訳する男って格好悪いわよっ」

「……」

完全に反論を封じられてしまった。

江梨子課長は再び身体を起こすと、ベッドから降りた。四つんばいの格好でソファに座った。「さっさと」になり寄って来る。

「本当に手間がかかるわね」

「か、課長っ！」

「もう。こんな場面で課長なんて呼ばないでちょうだい」

江梨子課長はまたしても子供のようによねた表情を作った。

「……それじゃ、な、何と呼べ……っ」

「江梨子っ、名前で呼んで」

「……」

またしても、腰骨の辺りに鈍い衝撃を感じてしまった。

「……江梨子……せんっ」

「うぶぶ。せん」付けて動弁してあげるわ

江梨子課長……いや、江梨子さんはくすくす笑いながら、スラックスのジッパーを下ろした。その下のトランクスをいじって、前開きを全開にしてしまう。その間、逃げるなんて選択肢はまったく思い浮かばなかった。

江梨子さんの目の前に、ぼろんと欲望器官が姿を現した。

まだ勃起はしていない。

しかし、そこには確実に興奮の前兆があった。

「あらっ!!」

江梨子さんが目を見開いた。

様子が予想と少々違っていたらしい。

「……やだ。この状態でこんななんて……」

江梨子さんは小さく呟いて、それと熱い視線を注いだ。物理的な刺激が与えられたわけでもないのに、牡の欲望を体現する器官がびくり、と大きく動いた。あの江梨子課長に見られてはいけないものを注視されているのだ。理性に反して、男性器はみるみるうちに膏を増していく。

「口ではなんだかんだ言いつつ、この「ハハハ」は「ん」にして「る」のね♥」

江梨子さんが上目遣いでこちらの顔を見上げてくる。唇の端がぎゅっと持ち上がり、笑みの形を作っていた。

江梨子さんの若鮎のように細い指が肉茎へと絡み付いた。

「え、江梨子さんっ!!」

「……熱いわ」

江梨子さんは何やら感嘆の息を漏らしている。

「ねえ、中野くん?」

そのまま尋ねられた。

「これはまだ完全に勃ったわけじゃないのよね?」

質問しながら、江梨子さんの指はそれをゆっくりと抜き立てている。

えも言われぬ快感が腰骨の辺りから背筋を上へ伝った。

「え、ええ。気持ちよくなったら、もっと大きくなります」

思わず要らないことを口にしてしまっ。

「そっ。それじゃ、ハハハするよ……」

江梨子さんは素直に言外の希望に応じてくれた。柔らかい掌がふくらみ始めた亀頭部をくしゅくしゅと擦り立ててくれる。それは見る見るうちに、てらてらと輝くほど膨張してしまっ。全体も隆と鎌首をもたげていく。

「……すっ。いわ。まだ大きくなる。血管がハハハしているわ……」

大きく開いた両足の間に座り込んだ江梨子さんは望み得る最大の快感を勃起器官へと与えてくれた。筒状にした右掌が肉茎を抜き立て、左掌がその下にしまった皺囊を優しく揉み上げている。白い指が静脈のハハハと浮いた表面を擦り立てる感触が堪らない。

「……あ……あ……ハハハ!!」

たちまちのうちに、最大の状態にまで追い立てられてしまった。大きく反り返った勃起が、

それをじき立てようとする江梨子さんの動きを阻害した。

「……すじく固いわ……」

江梨子さんも小さく呟きながら、自らの行為に熱中している。

双方共に興奮しているのだろう。激しくなった息遣いが汗の浮いた肌に当たって、すうすうした。

「え、江梨子さん。き、気持ち良過ぎますっ」

我ながら少し情けないが、素直に降参する。それほどに、江梨子さんの行為は気持ちよ過ぎた。

決して今まで女性経験がなかったわけではない。

が、江梨子さんが与えてくれる快感はとも過去のそれとは比較にならない。何しろ憧れの美人課長が足元に跪いて、一生懸命に奉仕してくれているのだ。あの白くたおやかな指が自分の外生殖器を扱き立てているなんて、とても現実とは思えなかった。

「先っばかり汗が滲みてきたわ。中野くんもっ出そうっ」

江梨子さんが尋ねてきた。

「続けてできるっ？ それなら、最初に一回出しておいた方が落ち着けると思っけど」
喘ぎながら答える。

「江梨子さんとなら、何回でもできそうです。ふだんだと、こんなに早くないんですけ

じ……」

情けない言い訳をした。本当に江梨子さんの行為は気持ちよ過ぎたのだ。

「つぶぶ。感じてくれてるんだ」

江梨子さんはつれしつれに微笑んだ。小さく舌なめずりしている。

「それじゃ、最初は口の中にちゅうだいな。飲んであげるから」

こんでもないことを言いながら、江梨子さんはその愛らしい口を大きく開いた。赤い口腔の中身が覗いたと思った瞬間、それが先端へぐすぽり覆い被さって来る。

「江梨子さんっ!? うっっっ!!」

衝撃を受けた。ぬらりと濡れた口腔粘膜の感触はまさに筆舌に尽くしかねた。柔らかい頬肉が固くしごいた肉茎全体をびったりと覆っている。快感にはくばくと開閉を繰り返す鈴口を、さざざらした舌先の感触が掃いた。温かい唾液が亀頭粘膜へと浸みる。

「あああッ!! え、江梨子さんっ!!」

もはや喘ぐことができないう、不随意に腰全体が震えた。

江梨子さんは腕を尻の方回して、その腰が逃げるのを防いでいる。

ほっそりと柔らかい唇の感触がすばすばと肉茎全体を前後した。江梨子さんが頭全体を揺すって刺激してくれたのだ。

「うっっあああッ!!」

上体を大きく折って、両の掌でその頭を抱え込むようにした。さらさらのボブ-cutを指で撫で梳く。そうでもしていないと、我慢ができなかった。

「ほんとに出ちゃいますよ」

思わず泣き言を漏らしてしまう。冗談抜きで、腰骨の奥の方に信じられないほどの快感の塊が煮え立っていた。

「いから、思い切り出してな」と

じつたん肉の塊から口を離して、江梨子さんは吐き出したそれへてちてちと舌を這わせた。再び先端部をかばりと啞え込む。ぼつりと肉の乗った脣が大きく傘を広げたカリ首をしこき立って。

転瞬、陰囊がきゅんッ!!と縮み上がった。

「あああッ!! ほほんと……っ……出るッ!!」

自分でも呆れるほど早い射精だった。

肉茎全体がびくびくと痙攣した。随意神経の支配下を離れた精囊が強い圧力で精液を押し出す。濃い白濁粘液が茎裏の尿道を破裂させんばかりの勢いで疾った。ふくらみ切った先端部から、江梨子さんの口の中へびゅうッ!!とばかりに噴き出した。噴き出してしまった。

「んむっ!!」

その勢いは江梨子さんの予想を大きく上回っていたらしい。

江梨子さんは目を白黒させつつそれでも口を離さないでいてくれた。

激しい射撃衝動がこつりと濃い精液を江梨子さんの舌の上へ連続的に撃ち出していく。

その間、江梨子さんの舌の先端は鈴口を優しく刺激し続けてくれた。

身体を硬くして、その愛撫を受け入れるほかない。

「うめっ……っ……っ……っ……っ……っ……」

自分でも驚くほど大量に射精してしまった。江梨子さんの柔らかい口腔粘膜に包まれたまま、陰茎がびくびくと暴れ回る。

「んむっ!」

そのあまりの激しさで、江梨子さんも受け止め切れなかったらしい。ぷりぷりと肉厚な唇の端から白濁した粘液が一筋、溢れ出すのが見えた。

そのまま、最後の一滴まで絞り出す。

頭の中まで空っぽになった。

「……っ……っ……」

引き撃るような感覚とともに、みつやく射精が終わった。自分でも信じられないほど盛大な噴射だった。思い切りたくさんのおどろおどろした精汁で、江梨子さんの神聖な口の中を汚してしまった。

「……んっ……んむっ!」

一向に勢いの衰えない陰茎を啞えたまま、江梨子さんは喉を鳴らして口中へと放たれた精液を嚙下した。細い喉がくびりと動くのがわかった。

本当に飲んでくれているのだ。強い吸引を感じて、いったん射精は収まったはずなのに、またびゅるびゅると間歇的に精液が滲み出す。

「……んんん……」

江梨子さんはその追加分も残らず吸い出してくれた。最高の快感だった。射精直後の龜頭を柔らかい舌先で磨き上げられて満足しない男はいないだろう。

「んはっ♥」

江梨子さんの口がよつやく離れた。その顔はきれいな桜色に上気していた。口の中に射精されながら、江梨子さん自身もかなり感じていたらしい。

「な、中野くん……」

江梨子さんは少し咳き込んだ。

「あなたの量がすこく多いわ。それに、すこく濃い」

江梨子さんは左手の指で唇の端から溢れた余りを拭った。それも舐め取ってしまう。

「窒息するかと思っちゃった」

「……すいませう」

恐縮した。弁護の余地はない

「つぶぶ。構わないわ。わたしで感じてくれた証拠だもの♥」

江梨子さんは笑って許してくれた。

「しかも、本当に一回出したくらいじゃ何とももないのね」

江梨子さんは根本に添えていた右手で、放精したばかりの肉茎をリズムよくしごき立てた。確かに、その心地よい刺激に、生殖器官は萎える暇すらなく勃起を維持していた。

「変になつてっ♡」

「次はどうするっ」

刺激を続けながら、江梨子さんが尋ねた。

「口だけじゃなくて、わたしのところだって自由にさせてあげろよ。何ならパイズリって言うんだっただかしら。乳房で挟んでっ」してあげようかっ」

魅惑的な提案だった。

でも、首を振って拒んだ。他にすることがある。

「今はいいです。それより、江梨子さんを感じさせてあげたい」

「あら、わたしのことはいいのっ」

江梨子さんは苦笑した。

「今夜はわたし、中野くん自由にさせてあげると言ったでしよっ」

「ですから、江梨子さんにも気持ちよくなって欲しいんです」

一生懸命な主張に、江梨子さんはくすりと笑った。

「中野くんったら、無欲なのね」

「違いますよ」

苦笑した。

「江梨子さんに気持ちよくなってもらうのが、こっちにとっては気持ちいいんです」

「まあ。言っわね」

江梨子さんが微笑みながら、立ち上がった。ベッドのところに戻って、再び身を横たえる。

「わかったわ。それじゃ、中野くんがしたいようにして」

素肌の上に巻き付けただけだったバスタオルの裾が少しはだけた。魅惑的な白さを持った脚が、その付け根ぎりぎりまで露出する。

慌てて服を脱ぎ捨てて、「こちら全裸になった。もちろん陰茎は勃起しっぱなしだ。

「江梨子さんっ」

大きく覆い被さった。ずっと憧れだった豊富な肢体を思い切り抱擁する。熟れ切った三十六歳の肉体には、たっぷりとした抱き甲斐があった。

「やっっ」

江梨子さんが小さく首をすくめた。

「中野くんったら、いきなり激しいのね」

「相手が江梨子さんじゃ、遠慮なんかできませんよ」

脇の下から腕をくぐらせて、掌で黒髪を梳くようにする。そのまま頭を固定して、江梨子さんの顔を迫った。

「ちよっ、ちよっ、中野くん」

江梨子さんが慌てた。

「ぎ、キスはだめよ。さっき口の中に出されたばかりだから、きつとまだ残ってるわ」

両手で自分の唇を拭うようにしている。

思わず笑ってしまった。

「自分で出した精液ですよ。わがままは言いません」

ふと別のことを思いついて、尋ねてしまう。

「……ひょっとして、身体は許しても、キスはだめなんですか？」

今度笑うのは江梨子さんの番だった。

「そんなこと言うわけないじゃない、キスしてもらえるのはうれしいわ。けれど、さっき自分の精液を流し込んだ口にキスするのは中野くんが嫌じゃないかしらと思っ」

「ですから、そんなわがまま言いませんわ」

今度は反論する暇を与えず、やや強引に唇を奪った。

「ふわ……んんんんッ!!」

事前のシャワーで一通り化粧は落としているはずだ。それでも江梨子課長の唇は充分に紅

く、そして最高の吸い心地を持っていた。

ぶっくりとした口唇を割って、口中へ舌を侵入させる。

「んんんッ!! んんんッ!!」

「んんんんッ!!」

きれいな歯並びを舌先でなぞると、江梨子さんは鼻から熱い息を漏らした。

双方の顔はほとんど二つに融合したように最接近している。超至近距離にあった江梨子課

長の目がうつとりと閉じられるのが見えた。同時に、歯の噛み合わせが開かれるのがわかった。

舌先が江梨子さんの口腔の最深部へと侵入を果たす。究極に柔らかい江梨子さんの舌が歓迎

してくれた。

江梨子さんの心配は杞憂で、そこは優しく甘い唾液の味がした。

「んんんッ!! んんんんッ!!」

「んんんんッ!!」

「んんんんッ!!」

舌と舌とを絡み合わせ、お互いに激しく舐り合う。唇の合わせ目から、二人分の唾液が攪

拌される粘液質の音が漏れた。

「んんんんはッ!!」

たつぷり五分近くキスを堪能した後、江梨子さんの方から唇を離した。至近距離から見

る江梨子さんの顔は薔薇の花びらのように真っ赤に上気していた。

「も、もつだめよ、中野くん。でないと、わたし、キスだけでイッチャいそつッ!!」

息遣いが激しい。江梨子さんはこちらから流し込まれた唾液を、何度にも分けて飲み込んで

だ。

「べつや、その言葉に嘘はないらしい。」

誇らしくなった。江梨子さんのような大人の女性をキスだけで感じさせたのだ。

「構いませんよ」

正直に言った。

「好きだけイッてください」じつと見てあげてますから」

「……中野くん、あなた、ひどい」たわ」

「うわこのように言いながら、江梨子さんは熱い頬を「ちんちんの胸に押し当ててるようにした。やや背中を丸められると、江梨子さんの肢体は腕の中にすっぽりと収まってしまった。

「どうやらしばらくキスは許してくれないらしい」

作戦を変更した。

まだ江梨子さんの肌の大事な部分を覆っているバスタオルの合わせ目、手を伸ばす。

「……」

江梨子さんはその動きを妨げなかった。

タオル地の布がベッドのシーツの上へぱさりと広がった。バスタオルでの拘束から解放されたそこには、まるで神への供物のように豊かな肉体が横たわっていた。

もはや江梨子さんの肌を覆うものは布一枚とてない。微かに汗ばんだ肌のすべてが空気にさらされていた。

「……」

息を飲んだ。

熟れ切り、たわわに実った女体のすべてがそこにあった。落花狼藉の風情とはこの状況をさす言葉に違いない。

空気に混じった微かに甘い肌の香りが脳髄を犯す。

江梨子さんが言った。

「……じつと見てるだけなんて許さないわよ。中野くんが好きないようにいじりなさい」

命令だった。

しかも、逆らうことの許されない絶対命令だ。

「どうやら「ちんちんの感嘆を「じつと取ったらしい」

「とんでもない誤解だった。むしろ畏敬による気後れだったのだ」

「ともあれ、わざわざ訂正することはない。素直に従った」

豊かに盛り上がった乳房へ手を伸ばす。掌全体で掴んだ。

表面に青い静脈の浮いた白い肌は最高の触り心地を持っていた。肌理細かくみつりとした肉感も申し分ない。今まで考えていた予想を大きく上回る乳肉の膏があった。指がふによりと沈み込むほどの柔らかさだった。

「掌全体を押し当て、思わず麓から頂の方向へとゆっくりと探み立てながら、尋ねた。

「「すいぽりゅーむですね。これ、何かツブツブからいあるんですか？」

江梨子さんは腕の中で小さく身体をすくめた。

「……Eカップよ。ついこの前までDカップだったんだけど、少し太ったの。ちょっと垂れちゃって恥ずかしいわ」

「そんなことありませんって……」

心の限りに絶賛した。嘘偽りのない真意の吐露だ。

「柔らかくて、すべすべしてて、江梨子さんのおっぱいは最高です！」

ついこのように呟きながら、裾野から頂まで、掌を何度も往復させた。

その先端で乳量が少し高を増し、ぷっくりと膨れ上がっていた。やはり膨れ上がり、存在感を強く主張し始めた乳首を指先で摘み、くしくしと刺激する。グミのような感触の乳首が指先から逃げ回るのが楽しい。乳房の白い肌全体がつすすらと桜色に上気した。

「あッ!! ああああッ!!」

江梨子さんはしつかり感じてくれているらしい。白い肢体全体が不随意に震えた。

両の乳房を平等かつ念入りに揉み込む。執拗とも言える愛撫に、江梨子さんは喘ぎを堪えられなかった。

「だ、だめよ、中野くん。そんなにおっぱいはかりいじらないで。へ変になりそうっ♥」

是非とも変になってもらいたかったのだが、口にするのは止めた。代わりに端正な曲線を描く首筋を寄せつゝ、掌での愛撫ポイントを脇腹に移す。

江梨子さんのアンダーバストからウエストにかけてはみっしりと充分な脂が乗って、本当の大人の女性だけが持つ絶妙の曲線を持っていた。そこもていねいに撫で回す。

「あッ!! その……はっ♥」

「あれ? こんなところがいいんですか?」

腰骨の近くに、とても敏感な性感帯を発見してしまった。

さっそく重点攻撃する。

「……あ……。や、やんっ♥ く、くすべったいような、ぴりぴりするよっな……」

江梨子さんは腰の辺りをもぞもぞさせた。どうやらここは江梨子さん自身が性感帯だと自覚していなかったらしい。この場所を制覇されたのはこれが最初なのだ。何やら誇らしくなった。

さらに執拗に、江梨子さんの肌への愛撫を進めていった。

首筋から鎖骨、乳房への唇を滑らせつゝ、おその周りを指先で撫でる。

「あああ……あんっ!!」

乳首を音を立てて吸うと、すべらかなお腹が大きく波打った。

交互に乳首を吸う頭を両の腕で抱かれた。こちらの両手の平は腰骨を経由して江梨子さんの身体の後ろ側回り込み、豊かな尻を鷲掴みにしている。ヒップの肉の量感もこれまた圧倒的だった。腰から尻、脚へ繋がる曲線は芸術的と評していいだろう。

頭を江梨子さんの腕輪から抜き、さっき見つけたばかりの弱点である脇腹へ手を落とし、

白い肌、紅いキスマークを記しつつ、指での愛撫点を太ももへ移していく。わざと脚を大開きにして、焦らした。

「……っ……あ……ああ」

江梨子さんの腰全体がもじもじと捻られた。

意地悪く、刺激の対象を太ももから膝にかけての方移してしまつた。女性にとって一番敏感な聖域への愛撫はお預けだ。

肌がぴんと張り詰めた太ももを両手で捧げ持つようにして膝頭に唇を押し当てると、江梨子さんは微かに不満そうな息を漏らした。

「中野くん……むごむご」

「染しみは最後に取っておくものです」

そのまま美しい脚線の感触を、掌と唇とでたっぷり堪能した。江梨子さんの脚はむだ毛がなく、すべて最高級の触り心地を持っていた。膝裏のひかがみ、ふくらはぎを経由してくるぶしの辺りまで舐める。足の指まで口に含んで、しゃぶり立ててしまつた。

江梨子さんはひどく恐縮して、指を小さく丸めてしまつた。

「そ、そんなところ、汚いわ」

「そんなところじゃ」

桜貝の貝殻みたいな指先の爪を舌先で磨くようにする。

予想に反して、江梨子さんはペティキュアをしていなかった。指の間の皮膚の薄いところを丹念に舐めると、口の中で江梨子さんの指がびくびくと震えた。

ほんのわずかに塩味がした。清浄な女神のような江梨子さんでも、こんなところはしっかりと汗ばむのだ。

両足の指を十本ともていねいにしゃぶり尽くすと、江梨子さんは腰をくねくねと捻って身悶えた。

「あ……あああ……。な、中野くんくすべつたっていうのは♥……でも、変な感じだわ」

その様はめっちゃめっちゃに可愛かった。

両のつま先を睡でぐちゃぐちゃにしてから、ようやく口を離す。刺激が過重だったのが、江梨子さんはぐくらはぎまでびくびくと震わせてきた。

「……あ、お願ひよ。これ以上意地悪しないで」

哀願された。

さすがに可哀想になった。

「わかりました」

素直に、今度は内股側を舐め上がっていく。

両膝の内側に掌を当てて大きく開くことすると、江梨子さんは一瞬その動きに逆らつた。「あッ！……ちよっ！……ちよちよちよっ！と待って！……さっきはあ言ったけど、やっぱり、だだめ

「よっー」
 「何がだめなんですか？」
 腕を差し込んで、少々強引に脚を割り開いた。

／ 濡けちゃっつかと思っただ♡

「!?!」

一目で何がだめなのかわかった。

江梨子さんの両脚の付け根周辺は指一本触れていないのに、それはもう壮絶な状況になっていたのだ。

江梨子さんはほんの少し毛深い方なのだと思う。本人もそれを気にしているのか、江梨子さんの秘所を縁取る和毛はその分ていねいに手入れされていた。縮れの少ない黒い毛がきちんと刈り込まれている。

上品な風格さえ感じられるそれがぶつたりと濡れ、すっかり膏を失っていた。本来覆い隠されているべき肉華が鮮やかに咲き誇っているのが丸見えだ。江梨子さんは采れるくらい大量に吐露していた。もはや「濡れている」なんて状態ではない、ほかほかと湯気でも上がりそうなくらい熱くなっている。

そして、複雑な構造を持った江梨子さんの秘所は完全に露出していた。鮮紅色を持った肉壁が大きくばつくりと開き、ばくばくと微かに開閉している。

さらに、その中央から驚くほど大量の華蜜が溢れ出していた。花弁から溢れ出た、わずかに白濁した液は会陰を伝わって、その下に慎ましやかに息ついた菊蕾までも濡らしている。む

わつとした熱っぽい雌の香りが鼻腔いっぱいを満たした。

「じゃあー 見ないかい」

江梨子さんはまるで少女のまぶたに恥じらいつつ、両の掌で自分の顔を覆った。本当は脚も閉じたかったらしい。

しかし、「ごちうの身体がすでに両脚の間につきり入り込んでいたので、それはかなわなかった。江梨子さんはきつて「ごちうの激しい息遣いすら、全身で一番敏感な場所を感じているに違いない」。

とぶりと、新たな蜜が華芯から溢れ出すのが見えた。

「どっして隠そうとするんです？ 江梨子さんの「い」とつてもきれいな口」

敢えて、灼けるほどの視線を注いでやる。江梨子さんは両掌で顔を覆っているが、痛いほどの視線を感じているのは間違いないだろう。

じっと注視していると、花卉の合わせ目がひとりりてに結び、充血した肉芽が顔を覗かせた。恐ろしく敏感だ。江梨子さんはそんなにも感じているのだ。

そこへ「うーっ」息を吹きかける。

「ふあああッ!!!」

江梨子さんはそれだけで電流でも流されたみたいに関全身を震わせた。

「だめよ。堪忍して、中野くん。そこにほんの少しでも触られたら、わたし、今度こそ本当にイッちゃっつわ。はしたない姿を中野くんに見せちゃっつ」

せっぱ詰まった声で哀願する。どうやらじゅくりと全身を撫で、舐めまわしたのが功を奏したらしい。今や江梨子さんの熱れ切った肢体はその内から溢れんばかりの快感で弾ける寸前だった。導火線が短くなった爆弾も同じだ。

でも、今度のお願いは却下することにした。

「どっぞ遠慮なく、思い切りイッてください。さっきも言った通り、江梨子さんがいくところを最初から最後までちゃんと見てあげますから」

「……ひびいわ、中野くん」

江梨子さんは今にも泣き出しそうだった。

「あなた、いつも女の子をこんな風に徹底的にいじめてるの？」

実際、目尻に涙を浮かべていたかも知れない。

可哀想だが、何故かそんな江梨子さんを無茶苦茶にしてみました。破壊衝動もあった。それに素直に従うことにする。

「相手が江梨子さんだからです」

口を大きく開き、一気に江梨子さんへとむしゃぶりついた。

「ひびっ! はああああああああああッ!!!」

江梨子さんの腰が大きく跳ねた。

ぱっくりと口を開いた膾腔がずぶりと舌先をねじ込みつつ、包皮から顔を覗かせたクリトリヌを指先で押し潰す。

例えでなく、江梨子さんの口から絶叫が迸った。

「いやあああああああああああつっ!!」

口の中に、生温い飛沫が噴き出したのがわかった。潮を吹いたらしい。複雑に入り組んだ肉腔が、これまた複雑に蠕動する。

江梨子さんの全身が大きく引き攣った。

そのまま、音を立てて柔らかい粘膜を吸う。舌先で柔らかい花卉の一枚一枚をていねいになる。快感神経の塊であるクリトリヌを指先でくりゆくりゆとくすくすくした。

真っ赤に上気した肢体が弓のように反り返り、びくびくとのたつた。

「あ………かっ……」

限界まで引き攣った身体はそのまま硬直した。

きつと江梨子さんは大きな快感で意識を真っ白に塗り潰されているに違いない。

空白の数瞬が過ぎた。

「あ………ああ………」

ぐっどから大きく持ち上がった腰が、とすとんと落ちた。硬く引き絞られていた肢体が弛緩する。

「……ふあ………♥」

江梨子さんは思いきりアクメを極めたらしかった。目の前の膾襞が思い出したように、びくびくと痙攣するのが見えた。

「な………中野くん」

江梨子さんは絶息寸前だ。

「こんな………こんなのっ………」

「べっぴんでしたっ」

尋ねると、江梨子さんは一瞬、絶句した。遅れて、心の底からの言葉を漏らす。

「………死ぬかと思ったわ♥」

「困りましたね」

「困りました………してっ」

江梨子さんがけだるげに頭を起こした。すっかり上気して汗が浮いた額に、前髪が一房貼り付いてる。

「だっつてっね、まだ前戯ですよっ」

「前………戯っ」

江梨子さんは言葉の意味そのものがわからないかのやうに、呆然とした。

説明するつもりです。

「だって、本当のセックスはまだしてません。今のはその前段階、言っなければ準備だったんです。それで死ぬかと思ったなんて言われたら、本番じゃ江梨子さんを本当に殺しちゃうかも知れない」

「あ……恐ろしい話ね」

江梨子さんは言葉の内容とは逆に、「妙につれしそうな顔で苦笑した。

「でも、今わたしは中野くんに殺されてもいい気分よ。むしろ早く殺して欲しいくらい♥ まったく困ったわ」

脚の間から身体を伸ばして、再度江梨子さんへ覆い被さった。

「それ、本当ですか？」

尋ねる。

「ええ、本当よ。中野くんを気持ちよくしてあげるなんて、わたしの考え方が間違ってたわ。二人で一緒に気持ちよくなりましょ」

答えながら、江梨子さんは首を伸ばして向こうからキスをしてくれた。

「……あ。でも、さっき江梨子さんにクニっしてはばかりなの」

「さっき中野くんはフェラチオしたばかりのわたしにキスしてくれたわよ？」

ようやく興奮がひと段落したらしい。江梨子さんは年上らしい余裕を取り戻しつつあった。年下の男の「己主導権を握られていたのが気に障ったかも知れない」らしくもなく、少しいじ

めじ子の顔だった。

「さっき散々に弄られたから、今度はわたしが中野くんを弄んであげるわ。覚悟なさい」

恐ろしいな言葉をされてしまっ

「……お手柔らかにお願いします」

「素直でいいよ」

少々おどけながら、江梨子さんは双方の身体を入れ替えた。今度は江梨子さんの方が上になる形だ。江梨子さんの重感に満ちた両脚がこちらの腰の上に跨って来る。豊かな乳房がたぶり、と揺れた。

「それじゃ……いっくわよっ」

江梨子さんが位置を合わそうと、いわずかに腰をずらした。

そのとき、唐突に思い出したことがあった。

「え、江梨子さん、さっきさっき待ってくださって、慌てぬ。

「今更、何なの？」

江梨子さんはちよっと不満そうだ。

やや台詞につつかえつつ説明する。

「そ、その……ひ、避妊しない……」

「あら、ちゃんと考えてくれるのね?」

江梨子さんはさもうれしそうに笑った。

「若い」の「とだから」このまま何も言わずに最後までいっちゃうかと思っただわ
「そんなことありません?」

強く否定した。江梨子さんにそんないい加減なヤツだと思われていたなんて、耐えられな
い

「それは今すぐ、江梨子さんのことは抱きたいです。けど、結婚もしてないのに子供ができたら、
江梨子さんが困ります。そのへんりの分別はつきましますよ」

当然の主張に、江梨子さんはくすりと笑った。

「何も子供みたいに口を尖らせることないじゃない?」

その笑みは慈母のようだった。

「中野くんがわたしの思った通り、優しい」でよかったわ。でも、心配しないでいいのよ」

言いながら、江梨子さんは自分の腰を落とした。まだ何も対策を講じていないので、お互い
の粘膜同士が直接触れ合った。

「え、江梨子さん?」

「でも、わたしね、まず間違ひなく妊娠しない身体なの。前の夫とだって避妊は全然しなかった
けれど、十年の間たった一度しか妊娠しなかったわ。それも十五週にならないうちに切迫流

産しちゃったくらいなのよ」

「……」

突然の壮絶な告白に、絶句するほかない。

「産婦人科の先生も赤ちゃんはまず無理でしょう?ですって。だから、このまま生で中出し
ちゃっても、中野くんが心配するようになることはないの」

「いや、でも……」

あまりに生々しい話を聞かされ、萎えそうになってしまった。

その感情が顔に出ってしまったのだろうか。

「なあに? 孕ませられないってわかったら、やる気がなくなった?」

江梨子さんが嘲るような笑みを唇の端に刻んだ。

「だから、そうじゃなくて……」

言いかけて、気づいてしまった。江梨子さんの表情の意味に、だ。

江梨子さんは女性としての基本的な機能が欠落している自分を嘲笑しているのだ。

その「と」に思い至った瞬間、決心した。

「これは口でどう説明しても無駄だ。態度で表わすしかない。江梨子さんの口下を大事に思っ
ているのだと言つたことを、行為で証明するほかないのだ。」

無言で両腕を伸ばし、江梨子さんの腰をがっちり固定した。

「……中野くん？」

江梨子さんが怪訝げな顔をした。

その江梨子さんに宣言する。

「……江梨子さんがよくないんですよ？ 避妊なしで本当に江梨子さんのこと滅茶苦茶にしちゃいますからね」

天を衝いてそそり立った欲望の象徴を、ずん！と江梨子さんの胎内へとぶち込んだ。予告なしの急襲だ。

「はっっっ」

勢い余って、江梨子さんの身体が浮き上がった。ごちらの一番先端が、江梨子さんの一番奥を強く突く。

「んはっっ！！」

極太の欲望を迎え入れた江梨子さんの膣壁がきゅっ！と締まった。

「っっ」

入れたばかりだといつのに、思わず精液を吹き出しかけた。

奥歯を噛み締めて、快感を耐えた。浮いた腰が落ちてくる勢いに逆らって、さらに突く。腰を押し付けたまま回して、柔らかな膣奥を滅茶苦茶に攪拌した。

「やっっ！ ちょ、ちょっつ、これは……。はっっっ！！」

慌てる江梨子さんの動きを押しさえつけておいて、その身体を内側からこりこりと擦った。

「やっっ！ だ、だめっ！ は、激しっ！！」

江梨子さんが苦しげに喘いだ。

でも、許してあげない。背筋を総動員して上体を起こし、目の前でたぶたぶと揺れていた乳房を吸い付いた。グミのような感触の乳首に歯を立てて、こりこりと甘噛みする。

「あああー……」

江梨子さんの口から、歓喜の声とも悲鳴ともつかない絶叫が溢れた。

さらに、胡座を組んで、その上へと江梨子さんの尻を抱え上げた。江梨子さんは両手でごちらの頭を抱え込むようにしている。

二人の体位は騎乗位から対面座位へと移行していた。かなり動きにくい格好だが、擦れ合う部位が変わって、江梨子さんはかなり強く快感を感じているようだった。激しい吐息を漏らしている。そのまま、たぶりと江梨子さんの胎内を突いた。

無意識にだろっ。江梨子さんの両脚がごちらの腰給み付いてきた。

膣奥の感触を存分に楽しんだ後、江梨子さんの上体を抱えたまま、ベッドの上へと下ろした。右脚を抱えて、左脚を跨ぐようにする。対面座位から、側臥する江梨子さんを交叉して突く形になった。

腰の動きが自由になったので、思うままに腰を振る。対して、江梨子さんは逃げることで

きないから、こちらからの衝撃をすべて受け止めるほかない。

「……あ……。……。奥……。奥が、こりこりして擦れてるっ」

二人の交接部から溢れ出た愛液がぐじゅぐじゅと泡立っているのがわかった。きつこの中には、先走りのカウパー氏腺液もたっぷり混じっているに違いない。カウパー氏腺液にも若干の精子が含まれているそうだから、これでもう生で中出ししたのと大差ない。

江梨子さんはもちこちらの思っがままだった。

「な……。なかのくん……。なか……。の……」

壊れた人形のように、こちらの名前を呟き続けている。

だから、本当に思っがままに蹂躪することにした。ぐったりと力の抜けた身体を俯せにして腰を大きく抱え上げる。動物のような体位で後ろから激しく突き上げると、江梨子さんは再び大きな叫び声を上げた。

「いやっ！ それ、だめー……ッ!!」

構わず、ずんずんと柔らかい膣肉を擦り立てた。

「……………!!」

江梨子さんはもはや声を立てることもできず、身体を硬直させている。

アクメを極めているに違いない肢体をさらに激しく攻め立てた。江梨子さんはもう、ずんずんイキ放した。

さらに後背位から身体を裏返して、正常位へと移行する。

「……………!! ……あッ!!」

イッた顔を見られたくないのか、江梨子さんは無意識に腕で顔を覆い隠した。

構わず、その身体を抱え、思い切り刺し貫いた。突く。抉り立て、擦り付けた。

ぶるぶると震え始めていたその白い身体が、ふいにびくりッ!!と大きく反り返った。

「……………!! ……んあッ!!」

本格的に絶頂を迎えたらしい。

同時に、陰茎を締め付ける括約筋がきゅーッ!!と布を搾り立てるように引き攣った。あまりの圧力に、二人の交接部から泡立った愛液がびゅるびゅると溢れ出している。

そしてついに「こちらにも、限界が訪れた。

「うおー……………!!」

獣の咆吼を上げると、先端を江梨子さんの身体が一番奥へとぐりぐり擦り付けた。

腰の奥で起こっていた快感の塊が弾けた。

とても今日二回目とは思えない濃厚な牡液が柔らかい膣粘膜の上で弾けた。江梨子さんの胎内で、何の遠慮もない中出しだ。断続的に、何度も何度も噴き出す。快感に呼応して位置が下がっていったらしい子宮口がびったりと龜頭に貼り付いて、精液を吸い出している気がした。

そのまま執拗に引き攣るような射精を繰り返した。避妊をしていないから、膣奥へ吐き出し

た大量の精液はすべて江梨子さんの体奥へと飲み込まれていく。

「んっ！ んんっ!!」

いぎんで最後の一滴まで流し込んだ。

江梨子さんは半分意識を失っているようだった。

長かった射精がようやく終わった。会心の射精だった。

「ふっっ」

ぐったりしている江梨子さんの上へ倒れ込んだ。

双方とも息遣いが荒い頬を押し当てた乳房が大きく上下していた。汗に濡れている。遅れて身体の下で江梨子さんが身じろぎするのがわかった。

「ん……んはっ……」

激しく喘ぎ過ぎたのが、江梨子さんは何度も唾を飲んだ。

「……な……中野くん♥」

江梨子さんの手が力無くこちらへ伸びた。指先を髪の中へ差し込んで撫で梳く。

「ず、凄かったわ。あなた、本当にわたしのことを滅茶苦茶にしたわね」

「……いけませんでしたか?」

尋ねると、江梨子さんは薄く微笑んだ。力の抜けた、でも無理のない笑顔だった。

「いいえ。最高に気持ちよかったわ。溶けちゃったかと思った♥」

そっ、男女が肌を重ねるのはただ子を成すためだけではないのだ。

それは何よりです。」

そっ、優しく口づつけた。「こちらも微笑む。」

「江梨子さんに喜んでもらえたのが一番うれしいです」

「はびく見つめ合ったまま、笑い合った。」

「中野くん……あなた、変わってるわね」

江梨子さんがしみじみと言った。

「こんなおばさんの相手をしてたって楽しくないでしょう?」

「江梨子さん、それ、よくないです」

面と向かってだが、ちゃんと指摘しておくことにする。

「離婚したばかりだからって、後ろ向きな考えになっちゃだめですよ。江梨子さんはとっても魅力的で素敵な女性です。もっと自信を持ってください。何しろ、こっちはその魅力に負けてめろめるんですから」

「めろめるって何よ、それ」

江梨子さんはさもおかしげに吹きだした。

「めろめるはめろめるです。もっ江梨子さんがいないと、生きていけないかも知れない」

「こちらはおくまで真面目な表情を崩さない」

とうとう江梨子さんは小さな声を上げて笑い始めた。

「うふふ♥ 確かに中野くんがわたしの魅力の虜なのは間違いないさそうね」

類ギネスをくれながら、腰の辺りを撫でさすって来る。

実は、一通りの行為が終わった後も、二人の身体はまだ繋がったままだった。一時期ほど強張ってはいないが、江梨子さんの胎内に残った肉茎はまだ充分な質量感を持って、柔髯の中でのさぼっている。ちよつと中出した精液が外へ溢れないように、栓をした格好だ。

「……もう一度するっ」

「グティッシュな視線で軽く睨まれつつ、尋ねられてしまった。

「じゃ、えーっ……」

困惑するほかない。このペースで肌を重ね続けていたら、本当に江梨子さんを責め殺してしまえそうだった。

その杞憂を弾き飛ばすように、江梨子さんがまた微笑んだ。

「何だかわたしも中野くんが相手だと、何度でもできそうな気がするのよ。」ちよつとおねだりしようかしら」

「……それじゃ、遠慮なく」

「あらっ、ずいぶんと簡単に……あんっ。いきなり強く突いちゃ、いやん♥」

二人はまた二人だけの愛欲の世界へと没入していった。

／あの夜のいっしょにしてください。

「……っ……っ……っ」

腕を組んで深く悩んでいたら、

「よお、中野。朝っぱらからこんなところまで何してんだ？」

後ろから井口先輩に肩を叩かれた。

「つひやおつ……」

心の準備ができていなかったので、思い切り驚いてしまった。わけのわからない悲鳴を上げて飛び上がったっけっ。

「おわっっ」

井口先輩の方も驚いて、目を丸くした。

始業前のBHSTオフィスである。より正確に言うならBHST本社ビルの六階、営業二課のあるフロアの廊下だ。

「びっへりさせんなよな、お前」

井口先輩が小学生の男の子のよう口を尖らせた。ずっと年上なはずなのに、「やんちゃな態度が妙に似合う。」

「先週末の飲み会で派手に飲まされてたみたいだから、これでも心配してやってたんだぞ？」

そうなのだ。あの運命の夜から二日が経っていた。江梨子さんと肌を重ねたのは金曜の深夜だった。

あの夜は結局《宿泊》コースになってしまい、結局一人暮らしのアパートへ帰りに着いたのは始発電車が動き出してからだった。それからの土曜二日間はまだ夢うつつのように過ぎた。何しろ自分の身の上で起こった事態が自分でも信じられなくてぼーっとしていたら、いつの間にか二日が過ぎていたのだ。我ながら、呆れるほどのボケぶりだった。そもそも月曜になった今も、まだ半分夢の中と言っている。

しかし、今朝のオフィスには、切迫した悩ましい問題が存在していた。

江梨子さんと会ったら、どんな顔をしたらいんだらう？

笑いたければ、笑ってもらっていい。

何しろ、先週の金曜日に会社を退勤するまで、まさか自分が一回り以上も年上の切れ者女上司と関係してしまっなんて、夢にも思っていなかったのだ。それが現実となった場合の心構えなんか、ちつともできていない。当たり前だ。いったいどんな顔をして江梨子さんと顔を合わせたらいいのか、さっぱりわからなかった。

「まあ、いや。それよか、早く席に着いて二つぜ。せつかく早めに出動してきたんだ。廊下でつだうだしてるところに朝礼が始まったりしたら、目も当てられねえぞ。」

そんなこちらの心情などまるで斟酌することなく、井口先輩はつかつかとオフィスのドアをみ寄った。ひどく気軽にノブに手をかけてしまっ。

ふだんならすぐに休憩コーナーに行っ、紙コップに入ったコーヒーを買う人が今朝に限って何を真面目ぶっているんだらう。

「ああッ!? まだ心の準備が……。」

「は？ 自分のオフィスに入るのに、何言ってるんだ？」

かちやりとドアを開けてしまっ。

「おはよういぢやない？」

ドアの向こうはただ広いオフィスフロアだった。BHSの営業二課は一係から五係までと営業共助係、都合六つの下部組織を持つ五十人を越える大所帯だ。肩くらの高さがあるパーテーションで係毎に区切られた明るい空間は左右に大きく広がっていた。天井が高い、向かい側の壁は全面が青っぽいガラス窓だ。

そして、今井口先輩が開けたドアの向こうがちょうど営業二課三係、長原係長が統括する係のある場所だった。入社二年目のルーキーたる中野史彦が座るデスクも、この三係の末席にある。

「お、おはよう。井口、中野。」

デスクの島のどん詰まり、係長席に座った長原係長が顔を上げてあいざつした。どつやら承認待ちの書類をチャックしていたとらららら。

「お、おはようございます……」

やや腰の退けた格好のまま、仕方なくオフィスフロア合足を踏み入れた。井口先輩はざつざと自分の席に着いている。始業の午前九時までまだ十五分ほどあるので、席にはまだあちこち空きがあった。

ふらふらと歩きつつ、長原係長の背後へ視線を伸ばす。三係はオフィスフロアのほぼ中央に所在するので、長原係長の後ろの窓際に他と独立して課長席があった。

「……」

江梨子課長はすでに出勤していた。他の課員より一回りサイズの大きなデスクに着いて

ノートパソコンを操作している。いつものように一分の隙もないビジネススーツ姿で、伶俐な視線を液晶ディスプレイへ注いでいた。

その目がふと上向いた。ぱちぱちと合っています。

「……」

しかし、それだけだった。

江梨子課長は毛の先ほども表情を変えず、再び液晶ディスプレイへ視線を落としていた。まるでこちらの姿など目に入らなかったかのようだった。

それはもちろん、あの江梨子課長がまるで女子高生のように、真っ赤になって恥じらうつもりでは思っていないかった。

しかし、その無視はあまりにも完璧に過ぎた。あの夜以前でさえ見せたことのない完全な無視ぶりだった。

「おい、どうしたんだよ、中野？ そんなところにぼーっと突っ立って」

遅れてオフィスへ入ってきた仙田主査が何か言っていた。

でも、そんな言葉が頭に入ってくるわけがなかった。

「……」

出来の悪いがくり細工みたいで、こちなく脚を動かして、ドアに一番近いつまりは課長席から一番遠い自分のデスクに着く。ぎくしゃくと椅子に座り、条件反射でデスク上に置かれたノートパソコンの電源を入れた。

視線の先は江梨子課長に固定されてしまっている。

「……中野？ お前、大丈夫か？」

「こちらの様子の異常さに気づいたのだらう。向かいの席に座った井口先輩が何か言っていた。しかし、その言葉が脳の言語野で意味のあるイメージを形成することはなかった。

「何だよ？ ひよつとして、まだ二日酔いなのか？」

ふぶつと言いながら、井口先輩は自分の仕事に戻った。週初めの月曜の朝は一週間分の行動スケジュールを確認したり、先週分の報告書をまとめたりと、何かと雑用が多いのだ。

ぽよぽよんと少々情けないサウンドが鳴った。ノートパソコンのOSが起動したのだ。デスク

トップ画面に、オランダのチューリップ畑をモチーフにした壁紙が表示される。

続けて、付箋紙ソフト、会社のホストコンピュータにアクセスするための端末エミュレータ、電子メールの着信を確認するメールチェッカーなど、常用するプログラムが順次起動されていった。最後に、

ぼん

メールチェッカーがこれまた情けない音を鳴らした。いくつか新しい電子メールが届いているらしい。

またしても脊髄反射でメーラープログラムを起動し、受信の操作をする。受信トレイを表わす表示領域に新着メールの発信日時、タイトルそして発信者名がべろべろと一覧表示された。どれも先週のうちに照会しておいた件に関する返事のようなのだ。

まずはメールの発信者名を確認する。

信用調査課ノ古藤一。

クレジットプログラム
P P Gノ滝口博親。

社会保険庁ノ中川さおり。

木羽鉱産(株)総務部ノ鹿屋正次郎。

営業二課ノ小島江梨子。

パランス・エレクトリック(株)ノ衛宮……

「ふ、小島さん」

半ば無意識に名前の文字列を眺めていて、思わず叫んでしまった。勢いよく立ち上がったすらしてしまふ。

「どうした？」

「素っ頓狂な声出して、何ことだ？」

三係だけでなく、隣りの四係の人たちにも注目されてしまった。

「……えーと……。あの、大声出して、すいませんでした」

首をすくめて、恐縮する。すこすここと再着席。

「月曜の朝はらから、何をほけてんだか」

「こちらを見ていた面々はすぐに興味を失って、自分たちの用事へと関心を移していった。まだ始業時間になっていないので、雑談を始める人も少なくない。

江梨子課長もこちらりと一瞬だけ、「こちらを一瞥するのが見えた。でも、すぐに手元の仕事に戻ってしまう。」

「……」

その姿と手元のメーラーの画面とを交互に見た。

「ごきゅつと口の中に湧いた唾を飲み込んで、マウスポインタを動かす。発信者名が「営業二課ノ小島江梨子」になっているメールを選択し、開いた。

新しく開いたウィンドウに表示されたのはたった一文だった。

あの夜のごことは忘れてください。

江梨子

金槌で頭頂を直撃されたような衝撃を受けた。

忘れてください？

冗談じゃなかった。頭に血が上るのが、自分でもわかった。

思わず、課長席を勢いよく振り返る。

ちよつとたまたまちちらちちらと視線を振っていた江梨子課長と目が合った。

江梨子課長の目が大きく見開かれた。きつちちらからの視線が殺人的な気配を孕んでいたからだろつ。

何か一言でも言つてやらないと気が収まらない。勢いよく席を立とうとしたとき、

「江梨子くん。始業前だが、ちよつといいかね。」

タイミング悪く、江梨子課長の前に営業部を統括する修五郎専務が立った。修五郎専務も兎嶋姓を持ち、もっぱら社内では名前の方で呼ばれている。

「はい？ 何でしよつか？」

「ちちらから修五郎専務へ視線を移しながら、江梨子課長はほんの少し困惑の表情を作った。営業部統括とはいいながら、修五郎専務が営業課員のいる大部屋に姿を現すことは珍しい。」

「いや、ちよつとごごはね……。」

言葉を濁しながら、修五郎専務はわざとらしく目配せした。

「それでしたら、朝礼が済みましてからお部屋の方へ伺いますが。」

江梨子課長の当然の言葉に、洪い表情を作る。

「篠岡くんや梶沢くんが顔を出す前に話をしておきたいんだ。」

篠岡は人事部長、梶沢は社長直属の秘書課長の名前だ。社内派閥的に、修五郎専務とは敵対している。

課長と専務との会話に背中を向けていたはずの長原係長が黙つてちちらに目配せするのが見えた。ちちちちら今の話は聞かなかつたことにしておけ。ちちちちちちしい。井口先輩や仙田主査が苦笑した。

「ちちちも腰を下ろさざるを得ない。」

その間に、修五郎専務が江梨子課長を誘い出すことに成功していた。

「どこか空いている小会議室がないかな？」

「月曜の朝ですから小会議室の空きを探すのは至難の業ですけど、小応接なら確か空き」

が……」

席を立ちかけた江梨子課長がノートパソコンのキーをいくつか叩いた。会議室予約システムで空き部屋を探しているらしい。ちなみに、江梨子課長はマウスをほとんど使わず、大半のパソコン操作をキーボードだけでやってしまう。

「第四小応接室が使われていないようですよ。午前中いっぱい利用の予定がありません」

江梨子課長の言葉に、修五郎専務はかくかくと頷いた。

「それじゃ、そこしよつ。構わんね？」

有無を言わせぬその口調に、江梨子課長は薄く苦笑した。

「それなりに約束アバがありますので、あまり長時間は……」

修五郎専務が苦虫をまとめて何十匹か噛み潰した。

「そのくらいは判つてるよ。時間は取らせん」

入社二年のペーパーでも、修五郎専務の時間は取らせんが最短二時間コースであることくらいは知っている。江梨子課長の苦笑がほんの少しほろ苦さを増した。

「それじゃ、わたしはちょっと席を外すから、一係の柳井係長にそう伝えておいてくれる？」

江梨子課長は自身の秘書役を務める営業共助係の女の子に言っけを頼んだ。本来、営業課長は週初めの朝礼には必ず顔を出さなければいけないことになっている。一係の柳井係長は営業二課に六人いる係長のうち最先得で、慣例的に課長代理とされることが多かった。

「わかりました」

女の子の返事に目で頷くと、江梨子課長は修五郎専務の後に続いて、営業二課のオフィスを出て行った。とてもプライベートなことを話しかけられる雰囲気ではなかった。

「……」

陰鬱な月曜日になりそうだった。

*

陰鬱な日は月曜日だけで済まなかった。

火曜日も水曜日も、江梨子課長は営業二課のオフィスにほとんど姿を見せなかった。ようやく自分の席へ腰を落着けたのは木曜日の午後になってからのことだ。しかも、すぐに配下の係長や主任を招集して、会議室に籠もってしまった。

遠目に姿を見ることができたのだが、わずか数日ですいふんとちつたように思えた。事情がおぼろげながらも判明したのは金曜日になってからだだった。

「なんだとぼちりりや」

三係のメンバー全員を小会議室に集めて、長原係長は事態をそう総括した。

「とぼちりりっていったいどういふことなんですか？」

係を代表して、仙田主査が質問した。

「それがな……」

長原係長はさも言い辛そうに、会議テーブルの上へ肘を突いた。しばし逡巡した後、説明の口火を切る。

「うちの江梨子課長が最近、離婚した話はみんな聞いているな？」

苦笑した者、首をすくめた者、表情をなくした者。会議室に集まったメンバーのいずれもが、何らかの形でその問いに肯定の意志を示した。

もちろんその中には江梨子課長本人からその話を聞いた自分自身も含まれている。ちなみに、意思表示のパターンは、表情をなくした」だ。

「で、その別れた旦那なんだが、とある官庁で結構な地位にあつてな。社員の家族だからってんで営業一課の連中がかなり甘い汁を吸わせてもらってたらしいんだわ、これが」

何となく、聞かなくてもこの先の話の展開が読めた。民間企業を営業対象として分掌するわが営業二課に対して、営業一課の商売相手は主に官公庁である。つまり営業一課の売上数字のいくらかが江梨子課長の威光を高に着たものだったわけだ。その数字が江梨子課長の夫婦関係の破綻によって、丸ごと吹っ飛んでしまったのである。

「官庁本体はもちろん、所管していた外郭団体の分まで含めると、その凹み幅はちよつと……」じゃ簡単に口にはできないくらいでな。一課の言い分じゃ、この大穴はかなりの部分、江梨子課

長が悪いってな論法になるらしいんだ」

「そんな無茶苦茶な……」

長原係長の声に不満の声が上がった。特に憤懣やるかたない表情なのは先島先輩である。井口先輩と同期で、ライバル関係にある人だ。

「別にその穴は江梨子課長本人が作ったわけじゃない。一課の連中が江梨子課長の縁故関係を勝手に利用しただけじゃないですか」

至極当然の意見である。他のメンバーも皆、賛意を表している。

「……原則論だけで何ことも話を通じりゃ、世の中もつと過ごしやすくなるんだがな」

長原係長はさも面倒くさそうに苦笑した。あらかじめ準備してあつた資料をメンバー全員に配り始める。

「まア、キョードーセキニとやらで、そこに載つてる数字程度はわが営業二課が補填しないと、決算時期にそれはもうスバラシイ展開が社員の皆様全員に訪れるんだとさ」

「何入か、こりゃっ!?」

表計算ソフトで簡単に作られたらしい数字の羅列に、井口先輩が悲鳴を上げた。これまた、この場に居合わせたメンバー全員が賛同する叫びだった。

「年度初めに提示された数字も滅茶苦茶だったけど、こりゃアひど過ぎる……」

それはペーパーの入社二年目でも一目でわかる『天文学的な数字』だった。共同責任とやら

で手軽にこの売上金額が作れるのなら、誰だって今で原子力発電ができるだろう。

「三係に割り当てられた分について言えば、手持ちの『玉』が全部当たれば、一応、理屈上は計算が合わないわけじゃありません。けど、青田買いでこの話じゃありませんよ。」

仙田主査が大仰に嘆いてみせた。

『玉が当たる』とは、営業物件を無事受注できることを指す。

通常、営業一課が取り扱う営業物件は短くても三ヶ月、長いと数年をかけてじっくりと顧客を攻略し、受注する大口物件が大半だった。それを数ヶ月後に迫った決算期までにすべり取ってしまうことは将来的な食い扶持を食い漁り、消戻してしまうことを意味する。中長期的に見て、自分で自分の首を絞めることになるのは明らかだった。

「そもそも、そんな計算通りに玉が当たるわけがないですよ。」

「打率で六割を叩き出してもまだ足んねよって感じですよ。」

三係の他のメンバーも、てんでバラバラに空を仰いだ。肩をすくめる者も多い。

「するつてよ、あたしは定年を迎えられないってわけだ。」

メンバーの中で一番年高な福本主任が大仰に言った。大学生になる娘さんのいる福本主任はあと五年ほどで定年である。

奇妙な沈黙が会議室を満たした。

「……江梨子課長は何と？」

沈み切った空気の中で、質問した。

長原係長ががめた目でこちらを見た。

「やるしかないわね。だそつだ。今回の一番の被害者にそう言われちゃ、俺としては返す言葉がねえわな。」

「うたく、江梨子課長も何で離婚なんかしたんですかね。」

先島先輩が吐き捨てるように言った。

「かちんと来た。思わず呟いてしまつ。」

「……先島先輩も、江梨子課長が悪いって言うつもりですか。」

「別にそんなこと言ってるねーだろーがッ!!」

先島先輩が激昂した。胸ぐらに掴みかかってくる。

「やめとけよ。大人げない。」

井口先輩が取りなしてくれた。

「……け。大人げなくて、悪かったな。」

先島先輩はぶいっと視線を逸らすと、スラックスのポケットに手荒く両手を突っ込んだ。肩をそびやかして、大股を広げたまま、どかりと椅子に座り直す。ふて腐れたその態度に、周囲で苦笑が漏れた。もっとも、できるなら自分もふて腐れたいと考えた者も少なくないだろう。

「まず考えられる方策としては。」

長原係長が無理矢理、場をまとめる結論を口にした。

「何はともあれ、玉そのものの数を増やさなきゃならん。広報部のパブリシティデスク P、G、W、外部の D、M、屋や何やを焚き付けて、現在、緊急キャンペーンを展開する作戦を共助係の方で立案中だ。骨子が固まり次第、前倒して攻めていくことになるだろう。みんな覚悟しておいでくれ」

「……遺書でも書いておくかねえ」

福本主任がぼつりと漏らした冗談に笑う者はいなかった。

／「……わかったわ」

江梨子課長とようやく二人きりで話ができるようになったのは翌週の月曜日のことだった。何週間も前からの約束で、一緒に営業同行する予定になっていたのだ。移動の大半はタクシードル。

「……」

二人並んで後部座席に座っていないながら、お互いに発せられる言葉はタクシイに乗ってから十分以上なかった。そもそもタクシイに乗るまでも、必要最低限のことしかしゃべっていない。

「……えっ……あの……」

放っておけば地の底まで沈んでいきそうな心を鼓舞して、何とか声を絞り出す。

「え、江梨子課長……じゃなくて、江梨子さん？」

言葉の「ユアンス」の変化に気づいた江梨子課長……江梨子さんがようやくこちらを視線をくれた。ただし、その目には何の感情も浮かんでいない。

「なあにっ」

江梨子さんは完全に仕事用の声で言った。

「あのごとなら、忘れてちようたいとお願ひしたはずよ」

取りつく島がないとは「のこと」だった。

でも、黙ってこのまま事態を受け入れるわけにも行かなかった。

氣力を総動員した。

「忘れる「下」なんて……できません？」

「……本当に困った「ね」」

江梨子さんの表情がほんの少しだけ溶け緩んだ。小さく嘆息している。

「中野くんはどうしたいの？ またわたしとしたいの？」

江梨子さんは声を低く抑えながら、前席の運転手のことを気にしていた。渋滞に捕まったタクシートの車内には、二人の他には運転手しかいない。しかし、こま塩頭をした五十絡みの運転手はAMラジオから流れてくる懐メロの方興味を引かれている様子だった。

「したいとか、そういう話じゃありません？」

「一心、こちも声の調子を抑えて反駁する。」

「それじゃ、いったい何の話があるのよ？」

「こまで言うてから、江梨子さんはさも突拍子もないことを思いついてしまったとでも言わんばかりに、小さく吹き出してみせた。

「まさかわたしと正式につき合いたいなんて言つつもりじゃないでしょうっね」

儼然とした。

「……そんなにおかしい話ですか？」

江梨子さんの表情が固まった。

「ちょっと。本気なの？」

かなり悲しくなった。江梨子さんにとってはあの夜のこととはほんの遊びだったらしい。

「いけませんか？」

大の男がかなり情けないが、ちよつと涙声になってしまった。

「……まったく、何を考えてるのよ。」

江梨子さんは天を仰いだ。

「わたしと中野くんじゃ、親子とまでは言わないけれど、一回り以上も歳が違うのよ。おまけに、わたしはハツイチだわ。若くて将来性豊かな中野くんと恋人同士になんかなれるわけないじゃない？」

「検討にも値しませんか？」

かなり未練たらしいが、尋ねずにはいられない。

「検討して……ねえ」

江梨子さんはらしくもなく、弱く苦笑した。

「わたしの気持ちはともかく、世間がそんなことを認めるわけがないでしょ。そもそも今の中野くんなら、わたしなんか恋人にしなくても、つき合ってくださいって女性が引く手あまたでしょうっ」

「わたしの気持ちはともかく、」と、江梨子さん自身は「少くくならなら考慮していいかな」とか思ってくれてるんですね。」

相手のわずかな言葉尻にすがりついてしまう。

「その……あなたねえ」

江梨子さんは呆れた。

「一時の激情に身を委ねてしまつと、後できつと後悔することになるわよ。」

落ち着いた年上らしい人生のアドバイスをくれる。

しかし、今欲しいのはそんな言葉じゃなかった。

「構いませんよ。……江梨子さんのと、好きなんですか？」

考えてみたら、自分の気持ちをこんな風に江梨子さんの前で言葉にしたのは初めてだった。

「……直球勝負なのね」

江梨子さんは薄く笑った。その笑みはきつと苦笑だったのだと思う。

でも、ほんの少し違う「ユアンスも含まれている気がする」。

「申し訳ないけれど」

江梨子さんは視線をタクシーの正面方向へ戻しながら言った。

「今のわたしは色恋沙汰にかまけていらられる精神状態じゃないの。残念ながら、中野くんの手をしている余裕なんかないのよ」

それは企業戦士としての小島江梨子の横顔だった。

確かに情欲に溶け緩んだ女としての顔にも惹かれた。

でも、「一番最初に魅惑されたのはこの凛々しい横顔だった」。

「……それじゃ」

ひとりりで言葉が紡ぎ出された。

「江梨子さんの今の窮状を助けられたら、恋人にしてみらえますか？」

江梨子さんが再び「こちらを振り返った。かなり呆れている」。

「入社二年目のルキーがわたしを助けてくれるって言うの？」

「……話になりませんか？」

責めるような視線に、何となく気弱になってしまつた。

「こちらの变化に気がついたのだろう。江梨子さんの表情がほんの少し優しくなった」。

別に中野くんの努力を否定するつもりはないわ。でも、わたしを助けるとなると生半可な「と」じゃ間に合わないのよ。三ヶ月連続で課内の営業成績ナンパーワン、とかでなきゃ、まず間に合わないと思つた」

「三ヶ月連続でナンパーワン、ですか……」

確かに、突拍子もない話だった。入社二年目のペーパーにはほぼ完全に不可能と言ってしまつて構わないだろう。

でも、江梨子さんはそのほんのわずかな可能性を否定しないでくれた。

そして、そのことが妙につれしくもあった。江梨子さんも、認めてくれてはいるのだ。

「それじゃ、約束してください」

だから、宣言した。

「三ヶ月連続で営業成績ナンバーワンになったら、恋人になってくれるって」

「……本気なの？」

江梨子さんは半信半疑だった。

それは当然だろう。確かに、江梨子さんも多少はこちらの力を認めてくれていたかも知れないにしても、できることとできないこととの境界は厳然として存在するのだ。今の宣言はそのできないこと』に対する決然とした挑戦だった。

「本気です」

とんでもないことを言っている自覚はあった。

でも、江梨子さんを助けてあげたいという気持ちも確かに間違いなく存在していた。恋人つんぬんは置いておくにしても、江梨子さんの力になってあげたいことに違いはない。

「……わかったわ」

江梨子さんが言った。

「中野くんが約束を果たしてくれるのを楽しみにしている」

それから、江梨子さんは少し悪戯っぽく笑った。

「でも、中野くんはわたしの部下なのよ。大っぴらに中野くんだけを依怙鼻肩して応援するわけにはいかないわ。その辺は理解してね」

「はー」

簡潔に答えた。

一週間ぶりに晴れやかな気持ちになった。

「こちらもタクシーの進行方向正面へと視線を向けた。

渋滞が終わり、タクシーが少しずつ動き出した。

／「……がんばってな♥」

それから、文字通り地獄のような戦いが始まった。奮戦、なんて言葉が陳腐に思えるほどの激戦だった。

まず何より、自宅に帰れなくなった。まあ、帰ったとしても築十七年のくたびれたアパートに一人暮らした。生活品質としては、大した問題ではないかも知れない。

にしても、休日といつものがまったく消滅してしまったのには閉口した。

「おい、中野。お前さ、さすがにそろそろ休みを取らないと、組合が黙ってないんじゃないか？」

「そう言つ井口先輩も、そろそろメグミさんに連絡しないとやばいんじゃないです？」

営業二課の課員はほとんどオフィスに住み着いたと言われても仕方のない状況に陥っていた。

「いや、やばいことはやばいんだけどな。それより、狩野住建合持つてく提案書を仕上げるのが優先なんだよ」

「狩野なら、先島先輩が仰木建設に持つてったヤツを直せませんか？ シミュレーション結果の

ページだけ差し替えれば、」提案内容の項目はほとんど変わらないわけだし」

「え、そうか……」って、中野。お前、俺や自分自身のだけじゃなくて、先島の分の提案書内容まで把握してるのかよ？」

仙田主査や福本主任のチームのマーケティング結果をまとめたレポートも助けましたけ

ど……」

「そんな暇がほしいいつあったんだよ……」

「えっ？ 移動中の新幹線って電波が届かないから」って携帯電話の電源を切っちゃつと、邪魔が入らなくなるから、仕事がはかどるんですよ？」

「はかっ、新幹線で移動中くらい寝とけよ。お前、死人みたいな顔色してるぞ」

「井口先輩に言われたくないですって」

「いつ果てるともない激戦が延々と続いた。」

*

……ひと月が経った。

営業二課三係がほとんど根城にしている会議室の壁に、その月の業績集計が貼り出された。すげえな、おい。ちゃんと数字の帳尻が合ってるぞ

「わが仕事ながら、自分でも信じられませんね」

わずかな息抜きに、数人がその前で雑談している。

「おい、中野」

クリーニングされたワイシャツを受け取って 大量の取り扱いがあるので、出入りのクリーニング屋が会社の受付までクリーニング済み品を配達してくれるのだ 戻ってきたところを、先島先輩に呼び止められた。

「何です？ すぐに福島に飛ばないといけないんで、電車の時間が押してゐんですが」

「まあ、自分の営業成績くらい確認していけよ」

先島先輩に、業績集計表の前まで引「張られてしまった。

「おっ、来たな」

「撃墜王さまのお出ました」

何故か他のメンバーにも歓迎されてしまう。

「見てみる」

先島先輩が業績集計表に並んで掲げられたグラフを指さした。セールの名前の上、売上数字の多寡を表わす棒グラフの柱が並んでいる。驚いたことに、柱の背は『中野史彦』の上にあるヤツが一番高かった。

「……あれ？」

「もっつれしそつにしるよ。先月のナンバーワンはお前だったんだぜ？」

周囲からはしばし肩を叩かれてしまう。

「いや、でも、それはみんなに助けてもらったからで……」

「何だよ。このくらいは当たり前か。確かにお前はこのところ受注件数じゃかなり上位に付けてたんだが、一気に金額ベースでも伸ばしてきたからなあ」

「くそー。すつかりやられちまったぜ」

みんなから小突かれてもみくちやにされていると、

「仙田さん、居るかしら？」

会議室のドアが開いて、江梨子課長が顔を見せた。

「あれ？ オフィスの方に居ませんでしたか？」

逆に問いかけれ、困惑の表情を作る。

「姿が見えなかったから、こっちかと思っただけだ」

「それじゃ、食事に出てるんじゃないかなあ。いい加減にカツラーメンは食い飽きた、とか言うてましたから」

「そつ、なら、ちょっと待ってたくらいじゃ、帰ってこなすかじい」

行方を知っているらしい課員と言葉を交わしながら、江梨子課長は会議室の中へ足を踏

み入れた。

「あら、こちにも業績表を貼り出したのね」

壁の表を見上げながら、「ちらちらみ寄ってくる。

「中野くん、すこいわね。以前から受注件数のランキングでは上の方だったけれど、ついに売上

数値でもトツツじゃない」

にっこ微笑んだ江梨子課長の表情はまだ『上司の顔』をしていた。もともと、一人の女として喜んで笑顔は三係の他のメンバーは知らないのだけだ。

「ありがとっ♡はいます」

それでも、素直に部下として礼を言った。

「課長に同行していただいて決まったパランス・エレクトリックの数字が大きかったみたいです。おかげで一番が取れました」

「あら。あれはあなたが商談をきちんと締結シメグサできるレベルにまで持って行っていたから、素直に契約の判子をもらえたのよ。謙遜することはないわ。のんびりやっていたら、あれはともまだ契約にまで持ち込めていない案件だったでしょう」

江梨子課長の誉め様は諸手を挙げてと言っているものだった。多少のひいき目もあるのかと思っただ、他のメンバーの反応を見ると、そう極端なものでもなかったようだ。

「本来なら打ち上げに誘ってあげるのが筋なんでしょうけど、知つての通りな状況でしょうっ。許してね」

「ええ、構いませんよ」

鷹揚に微笑む江梨子課長の前で、こちらも穩やかに答えた。

でも、江梨子課長にだけ聞こえるように、小さな声で付け加えるのも忘れない

「……あの約束を忘れずにいてくれるなら、ね」

「っ」

その瞬間、ほんの一瞬ではあったけれど、江梨子課長の表情に『上司』ではなく、『女』としてのそれが現れた。目線が揺れ、瞳がほんの少し潤む。

そして、今回の褒美はそれだけで充分だった。江梨子課長も、ちゃんと約束を覚えてくれているのだ。

「それじゃ、福島の本亀本社で面談の約束アポがあるんで、出てきます。帰りは最終に間に合っただけですけど、長引くようならそのまま向こうに泊まって、明日の朝イチは水戸の神賀農産に回りますんで」

未練なく江梨子課長に背を向けた。椅子の背もたれにかけてあったフックの上着とビジネスバッグを手取る。

背後で江梨子課長が小さく呟く声が聞こえた。

「……がんばってね♡」

「約束を守ってくれるの待ってる」

ふた月目の活動はさすがに順調に、とは言いかねた。

そもそもひと月目から全力で無理を重ねてきたのだ。業務の各プロセスで様々な齟齬や軋轢が起るようになった。

「べっになってんだよ？ 今朝までにレポートを上げてくれるように言っただらうよ！」

電話口で先島先輩が信用調査課を相手に噛み付いている。

「先島アー！ 一々でけエ声で怒鳴ってんじゃねーよ」

その向こうでは、長原係長が胃薬の錠剤をぼりぼりと噛み砕いていた。ペットボトルの烏龍茶で「ぼ」ぼと飲み込む。

「井口のやつアいつたいつになつたら帰社して来んだよ？ 九時半から打ち合わせだらうつたらろーがよ！」

何とか係長の怒りが爆発する前に、外出していた井口先輩がオフィスに姿を現した。

しかし、井口先輩が身にまとった空気も荒れていた。

「くそっ！」

持っていた薄手のビジネスバッグを自分の机に叩き付けて、肩をいからせる。

「ふそつ相互の連中にやられたよ！ 何でレノフ食品工業を相手に、あんな料率が提示でき

るんだ？」

どうやら競合する同業他社に案件を奪われたらしい。

ぶっ殺されそつな物騒な目で、こちらも睨まれる。

「中野！ お前の方はどうなった？」

生命の危機を感じないではないが、素直に報告するほかない。

「宇治機械はまだ保留なんだそうです。何でも初穂の方の結果がわからないと返事ができないそついで……」

「アホか、お前はっ！」

怒鳴られた。

「宇治は初穂電産の下請けだぞ？ ほっぼつときゃ初穂系列の初穂信用保険で契約継続に決まってるんだろーが。初穂側が動き出す前に勝負をつけなきゃ負けだつて言つたらうよ！」

至極まっつなご意見を拝聴する。

「……井口。いい加減で勘弁してやれよ」

長原係長が取りなしてくれた。

「最初っから宇治は勝ち目のない負け戦さつてのはわかってただらうっ？」

「のんびり負け戦なんかやってたら数字が上がらないつて言ったのも係長ですよ。負ける勝負でも勝て！ なんじゃなかったんですか？」

「中野は十分に善戦してるぞ？ まあ新しい玉を拾ってくるのが上手いってのもあるんだろ？ が、勝率がお前と同じなら、受注件数、売上金額ともにお前との差は圧倒的だ。経験を積んできつとクローズできる力をつけりゃ、先月の売上ナンバーワンは決してブラフじゃない」

長原係長の論理的な説得に、井口先輩は子供みたい頬をふくらませた。

「そりゃア圧倒的に使えない部下で悪いこと言いましたね」

「ふて腐れても何となく憎めないのが井口先輩の人徳である。」

「だから、俺の言葉を悪く取るなよ」

長原係長が苦笑した。

「逆に言やア、お前にはすでに十分な決定力があるんだ。後は中野並みに新規案件を拾ってることができりゃア、鬼に金棒なのだ」

多分に「ムンショ」っぽい上司の言葉に、井口先輩の頬のふくれ方が少し減った。

「……係長は簡単に言いますけどね。世の中はなかなかままならないもんです」

「んなことアお前さんに言われなくても、こちらら充分に承知してるよ」

場の空気が何となくしんみりとした。

「……そんじゃ、打ち合わせを始めますか？」

先島先輩が肩をすくめた。

長原係長と水島先輩が揃って苦笑した。

「そつだな。もうやくメンツも揃ったことだし」

「中野、お前は出られそうか？」

井口先輩に問われ、いじっていたノートパソコンの液晶ディスプレイを指さす。

「今やってる数字がきちんと合えば、出られそうなんですがね」

「……デューン・トラベルサービスが。あそこが納得してくれそうな数字が作れるのか？」

「負ける戦いにも勝たないといけないらしいですから」

わざとらしく首をすくめてみせると、井口先輩は薄く苦笑した。幸いネガティブ方向の苦笑ではない。

「んじゃ、期待しないで待つてるよ」

井口先輩、先島先輩、そして長原係長の三人は誘い合わせてオフィスから出て行った。いつも根城にしている会議室は泊まり込み組の仮眠室になってしまったので、最近の打ち合わせもほぼ休憩室の自販機横に置かれたベンチで行なわれているのだ。

ふと周囲を見回すと、三係のメンバーでデスクに残っているのは一人だけになっていた。各人の行き先を記したホワイトボードにも空欄はない。終業時刻はとうの昔に過ぎていたが、みんな一心に仕事に打ち込んでいるようだった。

「や、こちらでも他人事のように言われては行かない。絶対に一致しないとわかってる数値を何とか帳尻合わせしなければならぬのだ。そのためにノートパソコンに向かい直ろうとした。」

そのせい。

「あまり無理をしない方がいいわよ。」

すっぴ、すっぴ目の前に「T.T.T」の入った紙「ツプ」が差し出された。湯気と一緒に立ち上った「T.T.T」の芳香が鼻腔を満たす。

視線を上げると、すぐ傍に江梨子課長が微笑みながら立っていた。

神経が疲れているのだろう。課長が近づいてくるのはまるでわからなかった。

「いいただきます。」

ちよつともりながら、紙「ツプ」を受け取る。

江梨子課長は別に自分の分の紙「ツプ」も持っていた。

「それ、デューン・トラベルサービスの分よね？ どうにかなりそつ。」

タイトスカートに包まれた丸いお尻が機の端っこに、ちよこんと腰掛けた。さらさらのボツァに縁取られて、白い顔が目の前の液晶ディスプレイを覗き込んでくる。微かに、甘い肌の匂いがした。

「課長特認なしで、何とか帳尻を合わせますよ。」

ちよいちよいと保険料率のシミュレーション値をいじりながら、答えた。

「こいつが上手く決まれば、今月も何とか目処がつきますから。」

「……すっいわね。」

江梨子課長がゆっくりと「T.T.T」ちらを振り返した。

「本当に「T.T.T」月連続で営業成績ナンバーワンになっちゃっわ。」

「江梨子課長が自分で決めてきた数字と、鼻の差ですけどね。」

鼻の頭に皺を作ってみせると、課長はくすりと笑った。

年上の女性相手に失礼かも知れないが……可愛かった。

「中野くんは怒るかも知れないけどね……。」

江梨子課長はゆっくりと言った。

「わたしはあの約束は絶対に達成できないと思ってたの。絶対に無理だと思ってたのに、中野くんの申し出を承諾したのよ。ひどい女よね……幻滅した。」

わずかに小首をかしげる。

「……これまた凶悪に可愛かった。」

「……いえ。そんな」

おかげで、返事をするのが一拍遅れてしまった。

「溺れる者は藁でも掴むらしいですから。もつともこの若輩者が藁ほどにも頼りになるものかどうか、大いに疑問ではありますがね。」

不器用にウインクしてみせると、江梨子さんはまたしてもくすりと笑った。花のような笑みだった。

「冗談ばかり。……頼りにしてるわ」

江梨子課長は手に持っていた紙「コップ」を、デスクの上へとり、と置いた。

「こちら手渡したはずの「ヒートアップ」も取り上げてしまい、やはりデスクの上置いてしまっ……」

その行動の意味がわからず、困惑する。

その際に、江梨子課長は両腕を伸ばして、「こちらの首締めつけた。江梨子課長の白い顔が急接近してへる。

「……えっ？」

瞳目する暇もあればこそ。江梨子課長……江梨子さんの柔らかい唇がこちらのそれにちゅっ！と押し当てられた。

「%#@*ツツツ!!!」

突然のキスに、パニックになる。

江梨子さんはすぐに身体を離れた。

「これだけしておくわね。でないとな、わたしも我慢できそうにないから」

「にこっ、とろけるような笑顔を見せる。

「中野くんが約束を守ってくれるの、待ってる」

囁くように呟くと、江梨子さんはきつと腰を上げた。デスク上に置いた紙「コップ」の一つを手

にとって、颯爽と課長席へ去っていく。

「……」

その後ろ姿を呆然と見送った。

まるで春の突風が吹き抜けるように、本当に一瞬間の間のことだった。

デスク上に一つだけ置かれた紙「コップ」の上縁に、紅い口紅の痕が残っていた。

それだけがさっきのことが幻ではない唯一の証だった。

／「……あ……」

「中野くん、その……顔色がすくれないようだ、大丈夫なのかね？」

お客様に心配されてしまった。

まったくケールズマンとして失格だ。大事な契約の場なのだ。あくまで和やかな雰囲気を保たなければ。

「心配には及びませんよ。若さと健康だけが取り柄なんです」

多分に無理をして、強引に笑顔を作った。

実際には、視界がぐるぐる回っている。鼻の奥がつんとした。さすがに三連続の徹夜はヤバかったかも知れない。

「いや、それならいいのだがね」

木保産業の木保社長は釈然としない顔をした。年商三十億円の企業を一代で興した社長のモットーは『氣遣い第一』なんだそう。その社長に自らのモットーを実践させるのは言語道断である。氣遣いをするのは顧客である木保社長ではなく、保険商品を売り込むこちらの側であるはずなのだ。

「べこそ、気になさならなくて下さい」

同行してもらった長原係長がフォロウを入れてくれた。助かる。

「いや、そうはおっしやるがね」

木保社長は苦笑した。

「中野くんにはごちらの無理を色々と聞いてもらって、ようやく今回の契約という形になったんだよ。ご苦労をかけてしまったのではないかと気にしててね」

「いえいえ、お客様の苦勞を肩代わりするのが我々の仕事ですから」

やんわりと相手の言葉を受けつつ、しっかりとビジネスのプロセスを進めていく。

持参した鞆から書類の綴りを取り出した。

「そういたしましたら、社長。こちらがお話ささせていただいていた保険契約書になります。内容についてはすでに充分にご説明させていただいたはずですが、もう一度ご確認いただけますか？」

書類を差し出す手が微かに震えてしまった。三徹くらいでがたがたしやがって。わが腕ながら、本当に不甲斐ない。

「あ？ ああ、わかったよ」

木保社長は一瞬怪訝げな表情をした後、それでも素直に書類を受け取ってくれた。表紙をめくり、ページごと内容を斜め読みする。

「いやあ、本当に色々が無茶を言ったものだが、よくあの短期間でこの条件をまとめてくれたよ。おっしゃいますようにはいかなかったらどうね」

「恐縮です」

隣りで、長原係長が頭を下げた。

「うん、要点はちゃんと押さえてあるようだ」

木保社長は契約書類をテーブルの上に置くと、傍らに控えていた秘書に声をかけた。

「斉藤くん、公印を持ってきてくれるかね」

やや曇り立った女性秘書がいったん下がり、会社の公印を持参してくる。

「苦労さん」

木保社長はそれを受け取るといったん脇に置き、ボールペンを手に取った。クロスの高級品だ。それで契約書の所定欄に、代表取締役社長として記名する。

タイミングを見計らって、女性秘書が朱肉を差し出した。

木保社長は黙ってそれを使い、たった今記した自書の隣り公印を捺印した。

「……うーん……」

腕を伸ばして、そのできあがり具合を確認する。

「むむ」

納得が入ったのか、木保社長は書類綴を半回転すると、こちらを差し出した。

「ありがとうございます」

頭を下げ、それを受け取るうとする。

その瞬間、くらくらと世界全体が回転した。

「!?」

一瞬ではあるが平衡感覚が喪失し、差し出そうとした手の動きが止まる。

「？」

長原係長が怪訝げな顔で、「こちらを一瞥した。代わりに、木保社長から書類を受け取ってくれる。」

「確かに、いただきました」

揃って頭を下げた。

再度、世界が回った。

「……中野くん？」

木保社長の声がひどく遠くから聞こえた。

なぜだろう？ 世界がふらふらと不安定に回転するのが止まらない

「……あ……あれ？」

応接室のソファに座った自分の上半体が不安定に揺れているのがわかった。

本格的にヤバイ。頭の中でどこかで警報が鳴った。

「す、すみません。やはり気分がすぐれないので、失礼して……」

立ち上がり、退席しようとした。

それがよくなかった。
世界の揺れが大きくなった。
頭蓋の中で、柔らかい脳髓がべしゃりと崩れる感覚がした。
平衡感が完全に喪失した。
自分が今どちらを向いているのかわからない。
視界の端の、あり得ない方向に天井が見えた。
「……あ……」
みるみるうちに、意識が何かの暗黒へと飲み込まれていった。

／＼「そもそも無理な話だったのよね」

「まったく、信じられないわー」

希美ちゃんはまだで自分のことのように憤慨した。

「いつも思ってた、いったい何をどうすればこんなに、ぼろぼろになるまで仕事できるのよ」

「!?」

ぶりぶりと怒りを発散しながら、バインダーに何やら書き込んでいる。

「いや、希美ちゃん……」

「はい、そこー腕を動かさないー」

言い訳しようとしたら、怒られてしまった。

確かに、ぶりぶつ糖の輸液点滴を受けている左腕を動かすのはまずいだろう。

「おじおと、口にチャックをした。」

一方、点滴の滴下の具合を調整しながら、希美ちゃんは憤懣やるかたない様子だった。

「そもそもフライトハラスって外資系の保険業界でも有名な最大手なわけでしょ？ あたし」

「だって名前を聞いたことあるわ。その外資系大手保険会社のエリート社員な中野さんがどー」

「して過労でぶつ倒れるほど働かされたのよっ!」

「まるで自分のことかっつ!」

「いや、別にナース社員ってわけじゃ……」

「だって、入社二年目の新人なのに、二ヶ月連続で売上ナンバーワンだったって聞いたわ」

「こちらの台詞を途中でぶった切って、最後まで発言させてくれない」

「えーと、なんてしたっけ。見舞いに来てた井口とかゆー、かっちよいー先輩が言ってたわよ」

締め日まで残り一週間でぶっ倒れたりしなかったら、今月も中野がぶっちぎりでナンバーワンに間違いなかった』って」

「……」

蕩々と語る希美ちゃん言葉に、絶句してしまふ。

そう。結局、江梨子課長との約束は守ることができなかった。商談の最中に昏倒し、救急車で病院に担ぎ込まれてしまったのだ。最悪だ。きっと江梨子課長もあきれ果てているに違いない。

「でも、中野さん、ラッキーだったわよ」

何やら希美ちゃんの発言の論旨が変わっていた。

「……えっ？ 過労で倒れるのがラッキーなの？」

「だって、ぶっ倒れたおかげで、無理矢理働かされずに済んだし、あたしみたいにきゃわゆい看護師さんと出会えたんだもの♥」

そんな素っ頓狂なことを言つと、希美ちゃんはきゃらきゃらと陽気に笑った。

第一印象からそうだが、この二ヶ月下の女性看護師は能天気なまでにポジティブな思考の持ち主だった。

「いや、むしろ中野さんみたいにかっちよいー人と出会えたあたしのほうがラッキーかもー♥」
うれしそうにベッドの布団の具合まで直してくれる。

「最初にこの病院の救急に担ぎ込まれたときは中野さん、まだ昏睡状態で意識が全然なかったんだけどね。あたしは一目見て、きゃー♥♥このヒトがあたしの運命のヒトなんだわ♥』って、びびって感じたもんな」

……ポジティブな思考の持ち主と言つより、『電波ちゃん』と呼んだ方がいかも知れないそもそも『槇野さん』と呼ぼうとしたところ、『希美ちゃん』って呼んでくんなきやダメーッ！』と、無理矢理今の親しげな呼び方を強要されたくらいなのだ。

もっとも、そろそろ二週間に及ぼつといつ入院生活が陰惨なものにならずに済んでいるのは希美ちゃんの明るさのおかげではあるのだけだ。

「あ、そーだ」

突然、何か思いついたように、希美ちゃんは自分のほつべたに人差し指を当てた。

「中野さん、中野さん」

「はたはたと枕元の方をぶって来る」

そして、こちらの顔を覗き込むようにして、希美ちゃんは尋ねた。

「……そろそろ溜まっていっ、
妙につれしそうだ。」

慌てて首を横に振った。

「で、トイレのことかい？ それなら、自分で歩いていけるようになったから、大丈夫だよ」

「そんなのだ。入院二日目に意識を取り戻した当初は、残念ながらもすぐに身体を動かすことができなかった。そこで尿瓶を使って希美ちゃんに排尿を手伝ってもらったのだが、そのとき希美ちゃんは異様なまでに喜んだのだ。」

『うっわーっ!! ねえねえ、中野さんって過労で担ぎ込まれてきたんでしょ？ うっわーっことは全身ぐったり状態で』
「なわけ？ それじゃ、元気になったら、いったいどーなっちゃうのよっつっ」
「自分ではあまり意識したことがないが、何でも希美ちゃんによればわが愚息はちゃんびょん級なのだと言っ。以来、希美ちゃんの中野さんはあたしの運命の『下』説は別の意味でも補強されているらしかつた。」

「もうー。わかってるくせにっ」

希美ちゃんは自分の身体をこぢらすり寄せるようにすると、耳元でくすくす笑つた。

「中野さんってそろそろ入院してから二週間になるでしょお？ だいぶ身体は元気になつてゑはずだわ。それなら、色々と溜まつてるモノがあるはずよ。若くて健康な男の子なら我慢できない欲望が、ねっ」

困つたことに、希美ちゃんは恐ろしくポリコムのある乳房の持ち主だった。薄いバステルカラーになったナース服の上から想像するほかないが、下手をするとEカップの江梨子課長より立派かも知れない。

その凶悪に量感のある『肉の凶器』が、こちらの上腕ふにふによっと押し当てられていた。残念ながら、肉体的な反応は理性に所以するのではなく、本能によるものだ。希美ちゃんナース服から甘い肌の匂いが溢れているのを感じてしまうと、どっしりしようもなかった。腰の辺りに居心地の悪い違和感が発生する。

さらに、運悪く相部屋になつた他の入院患者さんたちは庭に散歩に行つたり、検査を受けたりして、誰も不在だった。まさに絶体絶命である。

「むっふー♥」

「えーと……の、希美ちゃんっ」

我ながら情けないが、最後の説得を試みる声は妙に甲高くなつてた。

この説得も、多分に無駄に終わる予感がする。この一週間、ずっと似たような誘惑が続いてきたのだ。いい加減、生殺し状態も限界に近かつた。

「っ、そのっせ。」

「あの……すこませせ？」

部屋の入り口から、おすおすと控え目な声があつた。

「ちえ、残念」

小さく舌打ちすると、それでも希美ちゃんは密着させていた身体を起こしてくれた。うれしくも困ったブレッシャーから解放されて、大きく息をつく。

その間に、居住まいを直した希美ちゃんが来訪者を誰何していた。

「えーと、どなたさまでですか？　中野さんはまだ本調子じゃないんで、お見舞いもできれば」
「遠慮いただきたいんですけどね」

その本調子じゃない入院患者から体力と精力を吸い取るつとしていたのはどこの看護師さんだろうか。

思わず、突っ込みそうになる。

ややきつい希美ちゃんの言い方に、来訪者はひどく恐縮している様子だった。

「申し訳ありません。あの……中野の会社の者なのですが……」

ふいに声の正体に思い至った。

「え、江梨子課長?!」

たまらずベッドの上に半身を起こしてしまった。

「モ、中野さんったら。点滴中は動いちゃだめって言ったでしょー」

希美ちゃんはさも困った風に肩をすくめると、入り口の方を鋭く睨んだ。

「課長さんってことは中野さんを過労で倒れるほど働かせた上司の方ですよ？　その課長さ

んが入院から一週間近く経った今になって、何のご用なんでしょう？」

それはもう毒を吐きまくりだ。きつと江梨子さんが美人の女課長であることが気に入らないに違いない。

「の、希美ちゃん。いいから、いいから」

小さく希美ちゃんをたしなめながら、部屋の入り口へ声をかける。

「ど、どうぞ入ってください、江梨子課長。入院中なんで、あんまりお見せできる格好じゃないんですが」

「それじゃ……失礼します」

ベッドの周囲を囲った白いカーテンの影から、江梨子課長が顔を覗かせた。

久しぶりに見える江梨子課長の姿だった。

「……その……元気だった？　って元気だったら、入院しているわけないわね」

何やら自分でボケて、自分でソックリだている。今までに見たことのない、おどおどした態度だった。顔も、以前よりかなりやつれて見える。

会社から直行してきたのだろう。いつも見慣れたフツ姿だった。小さな花束を持っている。本当はもっと早くお見舞いに来ようと思ってたのよ。でも、課長として仕事をほったらかしにするにはできなかつたし、そもそも仕事の量が半端じゃなかつたし……」

江梨子さんの言葉は途中で口の中に消えてしまった。

「その……」めんなね。」

がっくりと肩を落として、しょんぼりする。

苦笑していった。

「気になくてもいいですよ。」

ソッドサイドのパイプ椅子を座るよう勧める。

「井口先輩に聞きましたけど、何とか課の売上目標はクリアしたそうじゃないですか。きっと事務処理量も半端じゃなかったんでしょっつ。」

パイプ椅子ごとんと腰を下ろすと、江梨子さんは薄く苦笑した。

「中野くんたちががんばってくれたおかげで、クリアできたんだもの。文句は言えないわ。」

「がんばったと言っても、三ヶ月連続売上ナンバーワンの約束は守れませんでしたけどね。」

ほんの少しほろ苦く気持ちを吐露すると、江梨子さんは見えていておかしいほどに色を失った。「そっ、そんなことないわっ!! 今月の一位を取った井口くんだって、中野のアシストがあったおかげだ」って。本当の今月ナンバーワンは絶対に中野くんよ! ええ、絶対に!」

カクカクと、壊れた人形のように一人で頷いている。

らしくもなくあわてふためいたように、何となく江梨子さんをいじめたくなってしまった。

「でも、そう言ってるのは江梨子課長だけで、数字上のナンバーワンはやっぱり井口先輩なわけですよなね。」

「それはそっただけ」……」

江梨子さんはいよいよ元気を失ってしまった。そろそろ勘弁してあげた方がよさそっだ。

すると、何故か腕を組んだままその場に残っていた希美ちゃんが口を挟んできた。

「ねえ、ひょっとして中野さんが倒れるまで働いたのって、この課長さんとの約束を守るためだったのっ。」

会社の関係者ではない希美ちゃんに隠していても仕方がない。正直に打ち明けることにした。

「ああ、そっだよ。三ヶ月連続で売上ナンバーワンを取ったら、恋人としてつき合ってもらっつ約束だったんだ。」

言外に、「私たちの心は江梨子さんにあり、いくら誘惑しても無駄だと言い含めたつもりだった。」

だが、希美ちゃんの反応は「私たちの予想を裏切るものだった。」

「ぶっ」……」

希美ちゃんは胸を反らしたまま、座っている江梨子さんを半目で見下ろした。

「でも、中野さんはその約束を守れなかったんですよ? それって、この課長さんと恋人にならないってことなんじゃないです?」

俯いていた江梨子さんが弾かれたように希美ちゃんの顔を見上げた。両の目を大きく見開いて……。

「……そう……それは……」
 「そうですね？ 中野さん」

希美ちゃんは江梨子さんの存在を無視してこちらに念を押した。得意げに鼻を轟かせながら笑っている。小悪魔の笑みとはまさに「れのことだった」。

「だいたい課長さんって歳、いくつなんでしょう？ 二十代ってことありませんよね？ 社会人二年生の中野さんと恋人としてつき合っにはバランが取れてませんよ。あたしみたいに二年下くらいが世間一般の常識なんじゃないです？ やっぱ」

「……っ!!」

希美ちゃんを呆然と見上げていた江梨子さんが慌てて俯いた。

そして、その瞬間、一瞬ではあるが、確かに見えてしまった。……江梨子さんが瞳を大きく潤ませ、目尻を真っ赤にして涙を堪えている様子が。

初めて見る江梨子さんの泣き顔だった。

「希美ちゃん！ 止めなよっ!!」

思わず、大声を上げてしまっ。

希美ちゃんが不満げに唇を尖らせた。

「えー？ あたし、何か変なこと言いましたア？」

にやりと笑っている。間違いない確信犯だ。きつと何を言っても無駄だろう。

そっちは放っておいて、江梨子さん注意を向ける。

「江梨子課長？ いや、江梨子さん？」

問いかけに対する答えはない。江梨子さんは深く俯いたまま、肩を細かく震わせていた。

「……そ……そう……よね」

ずいぶん経ってから、かろっつて聞こえるか細い声が漏れた。

「そ……そもそも無理な話だったのよね。わたしと中野くんが……その……こゝ恋人……になるなんて……」

「江梨子さんっ!!」

思わず怒鳴ってしまった。

びくっ!!と肩を震わせた江梨子さんがゆっくりと、俯かせていた顔を上げた。

江梨子さんは社内の一部で「氷の美貌」とまで言われていた。その江梨子さんの顔が涙でぐちゃぐちゃになっていた。目を真っ赤に泣き腫らしている。

「……ふえ……」

江梨子さんはまるで小学校低学年の女の子みたいな泣き声を漏らした。

「な、中野くん……。こゝこめんさい。わたし……わたし……っ!!」

そこで限界になったらしい。江梨子さんは勢いよく椅子から立ち上がると、その場から駆け去るうとした。

「江梨子さんっ!!」

名前を叫ぶと、一瞬だけ足を止めて、「こちらを振り返る。

「……っ!!」

でも、結局、脱兎のごとく病室から走り出てしまった。

「……江梨子さん……」

点滴のチューブを繋がれた身では、すぐにその後を追うことはできなかった。

「何あれ？　びーびー泣いちゃって。格好悪い」

一緒に江梨子さんの後ろ姿を見送った希美ちゃんが得意げに鼻を鳴らした。

「三十路過ぎてるくせに、若い男に熱を上げて未練たらたらだなんて、見てられませんよ
ね」

……生まれ初めて、腸はわたが煮えくり返るほどの怒りといつもを実感した。

こんな身勝手な女に欲情しかけていた自分の身体が自殺したくなるほど疎ましい

「……出ていけ……」

低い声で、できるだけゆっくり言った。

「中野さんっ」

「……出て行けと言ったんだ……」

自分の忍耐力に、自分で感動した。

点滴のチューブを引きちぎって、今すぐこの白衣の天使を偽装した雌豚をぶちのめしたい衝動を堪えたからだ。

「今すぐ、この病室から出てけっ!!!!」

絶叫した。

「先生に言っつて、担当の看護師も替えてもらっつ。二度と顔を見せるなっ!!」

頭のとっぺんにまで布団を被った。

しばらく誰の顔も見たくなかった。

／好きだもの

無事に退院して出社した会社は嘘みたいに穏やかな雰囲気になっていた。

「よお、中野。久しぶりー」

「ごうだ」。看護婦さんの圍で入院生活は満喫してきたか？」

会議室に何日も泊まり込んで血眼になって売上ばかりを追求していた企業戦士たちの姿はもはやなかった。ぐでーっとだらけた「たれ社員」ばかりだ。

「いや、それは一応、しっかりと休ませてはもらいましたが……。これはちょっとだれ過ぎなんじゃないですか？」

苦笑しながら指摘すると、ノートパソコンでソリティアに興じていた井口先輩が力無く笑った。

「いや、それが仕事をしようにも、上の連中がすっかりぐだぐだでな。何らかの方針を出してくれないと、動くに動けないんだ」

「べつべつとさすっ」

視線を長原係長に転じる。

呆れたことに、長原係長は自分の机でプラモデルを組み立てていた。ウオーターラインシリーズの駆逐艦《矢矧》だ。

「どつもお偉いさんらは、まさかわが営業一課が一課の穴埋めをしちまうとは思ってもいなかったらしいんだわ」

精密な構造物を甲板上に接着するために寄り目になりながら、係長は言った。

「なもんで、修五郎専務に責任を全部おつ被せて更迭。副社長派が経営陣（チヤムギン）の主流派を占めて、営業部を始め社内を大幅に組織改編、つてな青写真が全部パアってわけだ。今じゃ逆に修五郎専務が社長派の顔役になって、潜伏した副社長派の残党を狩り出すのに大忙しさ。次年度の営業計画もクソもあつたもんじゃねえ」

なるほど、それは脱力モノの話だった。過労でぶっ倒れる者が出るくらいがんばつたつてのにその結果がこれじゃ、やる気も何もあつたものじゃないだろう。

「それじゃ、江梨子課長の立場は……」

みらに視線を転じて、みつちやく異変に気づいた。

「……あれ？ 課長は？」

「どついつわけか、課長席は空席のままだったのだ」。

「ああ。江梨子課長なら、先週からずっと休みだぜ」

接着作業がひと段落ついたので、長原係長が顔を上げた。

「一応売上数値の穴は自分の部署で補填したとは言え、社内的な立場は微妙になつちまったからなあ。社長派、副社長派、どちらが天下を取っても、扱いが難しくなつたのは間違いないねえ。下

手すりや、適当な理由をつけてアメリカの親会社に左遷しちまおうなんて話もあるくらいだ。溜まった代休をまとめて消化します』と理由をつけて、家に引き籠もりたくなる気持ちもわからなくはねえな」

長原係長の台詞を聞き終わらないうちに、席を立っていた。いったん脱いでいたスーツの袖に腕を通す。

「係長、課長の自宅の住所をご存じじゃないですか？」

長原係長は組み上がった駆逐艦を手に取りながら、首を捻った。

「さアて、離婚する前に住んでたマンションの場所は知ってたが、確か引越したんだよね？」

「ああ、課長の現住所なら人事部でわかると思っぞ」

井口先輩が手を挙げた。

「またぞろ個人情報取り扱いがどーこーって」ネるかも知れないけど、バレーボールリーグの試合チケットが調達できりゃ、一発解決だな。人事部の芳江はあのプロバレーリーグファンだな」

「何だよ、井口。お前、まだあの女と切れてなかったのかよ」

先島先輩が話を混ぜ返す。

「すいません、先島先輩。話を進めさせてもらっていいですか」

断りを入れておいてから、先を促す。

「それで、井口先輩。そのチケットとじつのは……」

「ああ。あらかじめ潤沢に予算さえ供給してもらえば、ネットオークションでまず間違いなく入手可能だよ」

「それ、お願いします」

不ツの内ポケットから札入れを抜いた。

*

江梨子課長の自宅は意外に簡素なマンションだった。

確かに駅からの交通の便はいいが、広さはそうないだろう。せいせいがところどろクラムだ。六階建ての五階で、南向きなのは家賃を引き上げているかも知れない。

ともかく、そこは大手保険会社の課長が暮らしているとは思えないくらいの部屋だった。

「……」

到着してから一分近く逡巡してから、ようやくドアフォンのボタンを押した。

スチールドアの向こうで、小さくブザーが鳴るのが聞こえた。

「……どなた？」

ドアチャーンをかけたまま、スチールドアが小さく開かれた。

隙間から、ちらりと目だけが覗く。

「……中野です」

「がんばって、スチールドア全体が大きな音を立てた。

どうやらチキンをかけたままなのを忘れて、大きく開けようとしたらしい。

慌ててドアが開けられ、その向こうでチキンを外すかちゃかちゃ音が聞こえた。

「どうやら顔を出せる程度にドアが開く。」

「中野くん、どうしてここがわかったの？ この住所は二課の人には誰にも知らせていないはずだから」

江梨子さんは化粧をせず、すっぴんなままだった。ボブヘアも二つに分けて、肩の上で小さなお下げにしている。身に着けているのも白い「サットンシャツにキョロパンツとビートルフなものであった。いつもかっちりしたスーツ姿を見慣れているだけに、その普段着姿は新鮮だった。だしらない印象はなく、充分に美しい。

「……いやいや、可愛いファッションに見惚れている場合ではない」

「ちょっと不正な手段で、人事部のファイルを見せてもらいました」

正直に話した。

「まあ、真面目な中野くんがそんなことをするとは思わなかったわ」

江梨子さんは薄く苦笑した。どうやら不快感を覚えているわけではないようだ。

「ちょっと立ち話じゃ終わりにすまない相談事があるんですけど、中に入れてもらおうわけにはいきませんか？」

あくまでも正直に、正攻法で行くことにする。

江梨子さんはほんの少し眉をひそめた。

「中野くんには相談事があるかも知れないけど、わたしに話すことはないわ。帰ってもらえないかしら」

「まったくいへません」

ともあれ、黙って江梨子さんの言い分を聞き入れるわけにもいかなかった。

「いえ、帰れませう」

まずは「おちの立場を明らかにする。」

「でも江梨子さんは色々なことを誤解しているみたいなので、その誤解を解くまでは帰るわけにはいかなさそうです」

「……」

江梨子さんは無言のまま、肩越しに背後を見た。

わずかに振り返ると、連絡通路で繋がった向かいの棟の同じ階に人影があった。どうやら「おち」の様子をじっと窺っているらしい。「おち」の住民だろうか？

「……はあ」

江梨子さんはため息を漏らすと、スチールドアを大きく開いた。
「入って、話を聞こう」

江梨子さんの自宅へ入ることに成功した。

「お邪魔します」

半畳ほどの玄関で革靴を脱ぐ。

サンダルを突っかけていただけの江梨子さんはすでに奥の部屋へ引込んでいた。

「しつぷよ」

江梨子さんの呼ぶ声に従って、玄関に隣接するキッチンから奥の部屋へ進む。

事前の予想通り、江梨子さんの部屋は慎まじやかな2DKのようだった。ダイニングキッチンの奥は六畳ほどのフロアリングになっている。

背の低いソファが一つにガラステーブル液晶テレビの置かれたAVラック。妙に物の少ない生活感が希薄な部屋だった。

「座って。お茶を入れるわ」

江梨子さんは壁際に置かれた、キャスター付きの小さなワゴンへ歩み寄った。上に電気ポットが置かれ、下に組み付けられたガラス櫛にカップが並んでいる。

「すまませ〜」

言いながら、ロソファへ腰を下ろした。

「？」

正面に置かれたガラステーブルの上に奇妙な物を見つけた。

「ああ、それ？」

ティーバッグで紅茶を入れながら、江梨子さんが肩越しに振り返った。

「ちょうどそれを食べたのよ。大好物なの。変でしょ？」

それはガラスの器に入れられたみかんだった。シロップ漬けになった缶みかんだ。

「別に、変じゃありませんけど……。へえ、こんな物が好きだったんですね」

奇妙な感じがした。こんなにも江梨子さんのことが好きなのに、江梨子さんが好物の食べ物が何なのか、全然知らなかったのだ。

缶みかんはすっかり食べてるの
「ふだんから結構よく食べるんだけどね。どうしたわけかこのところ妙に酸っぱい物が欲しくて

説明しながら、江梨子さんが缶みかんの手前に紅茶カップを置いた。

「ミルクでいい？ 冷蔵庫にレモンスライスもあるけれど」

「ミルクティーでいただきます」

カップに添えられたスティックシュガーを手を取った。

江梨子さんは床の上に置かれたクッションに腰を下ろした。缶みかんのガラス鉢を手を伸ばす。
「わたしはこれ、食べちゃうわね」

小さなフォークでみかんの房を刺した。口へと運ぶ。

その瞬間、何故か江梨子さんの表情が強張った。

「……江梨子さん？」

江梨子さんは手にしていたガラス鉢をテーブルの上に戻すと、慌てて立ち上がった。小走りですり足の部屋から、キッチンに向かい出て行く。どうやら目的地はお手洗いのようだ。乱暴にお手洗いの扉が開けられ、その向こうからぐもったおっ吐の気配がした。

「……」

突然のことだ。呆然とするほかなり。いったいどうしたのだらう？

江梨子さんはすぐにまた姿を現した。

とは言え、さすがにげっそりとした表情をしている。

「……」

再びクッションの上へ腰を下ろしながら、江梨子さんは謝った。

「どうもこのご無理がたたったみたいで、体調がよくないのよ。過労なのは中野くんだけじゃなかったみたいね。しばらく生理も不順なの」

弱く微笑む。

その表情が怪訝げなものに変わった。

「……どうしたの？」

「……いや、その……」

苦勞して、唾を飲み込んだ。

突然、それまで思ってもみなかった考えが脳裏に浮かんだのだ。あり得ない話だった。いや、かつて江梨子さんはあり得ない話だと言った。

でも、その考えは気になって仕方のないものでもあった。万が一と言ったこともある。

「……えと……」

はかけた発想ではあるが、確認することにした。

「その……生理不順ですけど、どのくらい前から？」

唐突な質問に、江梨子さんはきょとんとした。

「生理不順のこと？」

頷いた。

「ええ。込み入った話で、申し訳ありませんけど」

「まあ、構わないわ」

江梨子さんは苦笑した。

「元々わたし、きちんと規則正しく生理が来る方じゃないのよ。でも、今回は新記録かしら。もう三ヶ月近く……」

最後まで聞かず、立ち上がった。
突然のことに、江梨子さんは瞳目した。

「びっくりしたのっ」

「ちょっと出かけてきます」

「びっくりしてっ？ 話があつたんじゃないのっ」

江梨子さんは困惑していた。当然だろう。

でも、それ以上にこちらが困惑していた。

「すぐに戻ります。駅前にあつたドラッグストアに行つて来るだけですから」

「ドラッグストアですってっ」

江梨子さんも立ち上がった。

詰問してへる。

「中野くん、あなたいつたいていつつもりなの？ 突然、部屋に押しつけてきたかと思つたら、わけのわからない質問をして、挙げ句の果てにドラッグストア？ ドラッグストアでいったい何を買つてくるつもりなのよっ」

「……」

すぐには口にできなかった。

自分でもあまりにはかけた考えに思えたからだ。

しかし、江梨子さんは許してくれなかった。

「何を買つてくるのよっ！？」

重ねて問われてしまう。かなり神経質ナーヴラスになっているようだ。

「……に……」

仕方がない告白した。

「……妊娠検査薬、です……」

「に、妊娠検査薬ですってっ」

江梨子さんは眼窩から眼球が転げ落ちてしまわないか心配になるくらい大きく目を見開いた。

「中野くん、あなた、バカじゃないのっ！？」

いきなり罵倒された。

「あなた、わたしが前の夫から離婚された理由を知らないでしょ。だから、そんなことが言えるんだわ！」

江梨子さんはヒステリックに喚いた。

「わたしはね！ 夫の愛人に子供ができたから、離婚されたのよ！ 若くて、健康で、元気な赤ん坊を産むことのできる愛人の方が大事で、若くなくて、やめろって言われたのに仕事を続けて、その上子供が作れない身体のわたしは要らないから、離婚されたの！ そのわたしを

捕まえて、よにもよって妊娠ですって？　人をバカにするのも大概にしてちょうだい！」

「バカになんかしてませんっ!!」

「ちっちも怒鳴り返した。」

江梨子さんに負けないくらい頭に血が上っていた。

「だって三月も生理がなくて、妙に酸っぱいものが欲しくて、しかもつわりみたいなおう吐があるんですよっ!?　産婦人科の先生も『まず赤ちゃんは無理』と言っただけで、天地神明に誓って絶対に赤ちゃんは作れないって断言したわけじゃないですよっ!!?　それに……」

最後の一言はさすがに躊躇した。

「それに何っ。」

でも、江梨子さんは相変わらず強い目で「ちちらを睨み付けていた。

仕方ない、言ってしまうことにした。

「それに何より、二人で三ヶ月前に、赤ちゃんができてちっちとも不思議じゃないコトをしたじゃないですかっ……」

「……なに……」

さすがの江梨子さんも絶句した。顔を赤くする。

ふと怖い考えが脳裏を過ぎった。

「……ひょっとして、赤ちゃんがでてるようなコトを、他にも……っ。」

「江梨子……　ほかし!!!」

江梨子さんは顔を真っ赤にしたまま、掌で「ちちらの肩をべしべし叩いた。

「あんなこと、中野くんと以外にするわけじゃないじゃないっ!!」

暴れる江梨子さんの身体を腕の中に抱き留めた。

「その言葉、つれいじです。」

江梨子さんの耳元で囁いた。

「……ずっと不安だったんですよ。ひょっとして、あれは気まぐれな火遊びのほんの一部だったんじゃないかって。江梨子さんにとってあの夜のことはよくあることの一つだったんじゃないかって。」

「……中野くんはやっぱりひどいじゃないか。」

暴れるのを止めた江梨子さんは自分の身体を抱き締める腕を、さらさらその上から抱くようにした。

「わたしのこと、信じてくれなかったのね。」

「だって一度も言っただけでまかせんかっ。」

「ちちちちっでいてみせろ。」

すると、江梨子さんは豆鉄砲を喰らった鳩みたいな顔をした。

「一度もっへ、何をっ。」

二人で出かけて、ドラッグストアで買った妊娠検査薬の反応は陽性だった。

／「あな たっ♡」

「ねえ、中野くん？ …… やっぱり止めない？」

江梨子さんはあきらめの悪い人だった。

「今更何を言ってるんですか」

もはや呆れることもできない

「でも、やっぱり恥ずかしいわまつ」

江梨子さんはまるで子供みたいに頬をふくらませてみせた。

かつて江梨子さんには「凛々しい女性」といつ印象を持っていた。けれど、もはやすっかりそのイメージは破壊し尽くされてしまった。

「何が恥ずかしいんですか。お世辞なんかじゃなく、きれいですよ」

江梨子さんはその股体を純白のドレスに包んでいた。ウエディングドレスだ。残念ながらレンタル品だが、豪華なデザイン、それは江梨子さんのイメージぴったりでとても映えた。

「でも、わたし、もうすべ三十七よ？ 今更このドレスはないんじゃない？ 何より、これが……」

嘆きながら、江梨子さんは自分のお腹を撫でた。

そう、本来であれば「ルセット」で締め付けられているべき江梨子さんのウエストは緩やかなド

レブになっていた。その下は大きくふくらんでいる。

すでに妊娠は七ヶ月目に入っていた。主治医の先生にも、もう流産の心配はほとんどないと太鼓判を押されている。

「いったい何が不満なんですか？」

苦笑した。

「本当は江梨子さんには文金高島田姿が似合うと思つてたんですよ。それを江梨子さんの希望を入れてウエディングドレスに妥協したんです。不満点なんかどこにもないじゃないですか」

大仰に両手を広げてみせる。

「中野くんのいったいどこが妥協したつて言つたよー」

江梨子さんは嘘泣きした。

「本当は紋付き袴が似合う日本人体型なのに、ドレスに合わせてタキシード姿になることを承認した。米国本社アメリカほんで大型のプロシエクトを任せられそうになっていたのを、夫婦揃つて日本こっちで出産育児休暇が取れるようにした。二十五年ロソンを覚悟で大きめの新居を購入した。どれもこれも、妥協の産物ばかりじゃないですか」

「だから、全然妥協してないよっ」

江梨子さんはだたをこねた。お願いだからウエディングドレス姿で地団駄を踏むのは止めて欲しい。

そのとき、

「おーい、新居新婦のスタンバイはまだかー？」

控え室のドアが開いて、井口先輩が暢気な顔を覗かせた。いつも営業マンにしてはややだらしなない格好をしていること多い井口先輩だが、さすがに今日は黒のタキシードではっきり決めている。

「おーっ！ 江梨子課長、素晴らしいじゃないですか。まったく中野みたいなスカプラチンキにはもったいないですよ」

井口先輩も江梨子さんのウエディングドレス姿を絶賛だ。

「……新居がスカプラチンキ呼ばわりなのは気に入らないが。」

井口くん、それ、ほんと？ 変じゃないかしらっ」

江梨子さんは肘の先まである白じ手袋を着けた手で、頭に被った純白のレースを少し直した。「いや、そりゃもう完璧ですよ。課長、俺が今この場でプロポーズしたいくらいだ」

井口先輩はいつものように、調子のいいことを言った。

「これから結婚式を敢行しちゃうつて言う新婦を、新郎の目の前で口説かないでくださいー！」「思わず手に持っていた手袋で、先輩の後ろ頭をはたいてしまった。

「おおっッ!? 手袋を相手に投げつけるのは古式に則った由緒正しき決闘の申し込み方だ

ぞ？ 中野、お前、ひょっとして結婚する前から江梨子課長を未亡人にしようってのか？」

……頭が痛くなった。

「バカなこと言っていないで、先輩もさっさと長原係長たちのところに戻ってきてください。うちもすくに行きますから」

蹴り出すようにして、井口先輩を控え室から追い出す。

「そんなじゃ、課長。また式場で」

「うふふ。楽しいお友達ですね。それではわたしも用事がありますので」

後かたづけをしていたフアイリストさんも出て行くと、控え室には江梨子さんと二人きりになった。

「ねえ、中野くん。やっぱりわたし……」

江梨子さんはまだ不満そうにしている。

うんざりした。

「ああ…… もうっ!!!」

「ちらりも不満を爆発させた。

「今更動弁してくださいよ、江梨子さん。十二歳年上なのも、課長とその部下なのも、きちちゃった婚なのも、みんなみんなみんな承知の上だっって言ってるんです。いい加減、黙って幸せにさせてやってください。」

「……あつ」

江梨子さんは小さく首をすくめた。

「中野くん、怒っちゃ嫌あな」

「それにですわ」

すでに何度も指摘したことを、またしても念押しすることになる。

「今日から江梨子さんも中野、江梨子になるんです。もう中野くんって呼ぶのも止めてください」

「ぶっっっ」

もうそろそろ母親になるついでに、江梨子さんは子供と変わらないふくれ方をした。

「……えーと、いったいどのどいつだっ。この三十七にもなって可愛さ大炸裂な女性を捕まえて凜々しいなんて言ってたヤツは」

「じゃあね、じゃあね」

江梨子さんは猫がじゃれつくように、タキシードの裾を引っ張った。

「中野くん、がだめなら、いったいなんて呼ぶはいいのっ」

「自分で考えてください」

「あーん、中野くんはやっぱりびびる」

江梨子さんがやんやんっ と身を抜ったとき、控え室の扉が再び開いた。今度顔を覗かせ

たのは結婚式場のスタッフの人だ。

「そろそろ時間になりますので、フタンパイをお願いします」

「はい、ごつまずいませう」

答えておいてから、江梨子さんを促す。

「さあ、行きまじょう。江梨子さん」

腕を差し出すと、江梨子さんは白い手袋を着けた手を「ちらの肘に絡ませた。

「ええ、そうね。あ、なたっ♡」

……江梨子さんには永遠にかなわない気がした。

(金元)

あつがき

ごうも。作者の星海です。「ほしつみ」ではなく、「ほしみ」ですので、お間違えなきよう。

さて、この作品「美人課長 誘惑残業中〜午後五時半からの江梨子〜」ですが、えらくベタにエロ小説っぽいタイトルが付いているのにはそれなりの理由があります。実は、黒表紙のえつち小説文庫本として本屋さんや駅のキオスクですっかりお馴染み、ランダム書院文庫の作品ライオンナップの中にそのものずばり、まったく同じタイトルが付いた作品が存在しているのです。しかも、エロマンの名前はちゃんと小島江梨子さんで、お相手の名前は中野史彦くん。槇野希美なる名前の看護婦さんまでしっかり登場します。外資系保険会社の美人女課長が年下になる部下の男の「を誘惑して……」ってな、大まかなストーリープロットでさえ同じだったりするので

す。
しかし、町村月^{ツキ}氏の手になるランダム書院文庫版のそれは他の黒表紙本と同じく、インモラルで凌辱色の強い作風になっています。サティスファク的な性向のある女課長が、その妖しい魅力で若い男を散々に弄ぶ話になっているのです。足「キで精液に汚れた足の指を、男にしゃぶって清めさせたり」とか(爆) 本編を既に「覧になった読者ならおわかりの通り、本作とはまったく異なった作品傾向です。

これを読んで、「基本的なシチュエーションは好きだけど、この展開はちょっとなー」と感じた

星海が自分で一から書き直した作品、それがこの作品なのでした。従って、あらずじから下のレベルでは、まったく別の作品になっています。

ってか、あり得ないくらいにベタ甘過ぎです。この話は、書いて、作者本人がそのあまりの甘ったるさや、いらぬ転がってしまいました。なんであらすじが同じなのに、ここまで違う話になってしまつのでしよう。書いてる本人が不思議です。

とまあそんなわけで、世にも珍しい「ランダム書院の黒表紙本の二次創作作品」が出来上がってしまいました。実用性という意味では今イチ中途半端なつてか、前半しか使えない作品ですが、読者諸兄に多少なりとも楽しんでいただければ幸いです。

それでは、また別の作品で。

星海航平 拝

美人課長 誘惑残業中

～午後五時半からの江梨子～

2004年10月23日

第1刷発行

著者 : 星海 航平

発行 : 煩惱.NET

<http://www.bonnou.net>